ISSN 2186－2125

文化学園長野専門学校

研 究 紀 要

第 3 号

2011

ISSN 2186－2125

文化学園長野専門学校

研 究 紀 要

第 3 号

2011

研究紀要　第 3 号

目次

＜原著論文＞

教育実習・保育実習における学生の自己評価の分析　----------　守　秀子　3
島田　左一郎
天田　広一
倉科　深陽
下平　正恵
石坂　由美子
戸谷　直喜

保育者養成課程におけるダンス教育の評価
－２種類の「リズム性が豊かなダンス」の指導順序の質問紙調査から－
----------　石坂　由美子　17

＜総説論文＞

児童に対する養護観の歴史的展開について　----------　竹前　健治　27

＜報告論文＞

保育科学生による創作ミュージカル
－平成 22 年度卒業共同研究　不思議なたからもの－
----------　下平　正恵　37

＜研究ノート＞

介護福祉士養成課程における
「世界の高齢者介護」を学ぶための効果的な教材・資料について
----------　佐藤　登紀子　77

教育実習・保育実習における学生の自己評価の分析

守　秀子　　島田　左一郎　　天田　広一
倉科　深陽　　下平　正恵　　石坂　由美子　　戸谷　直喜

Analyses of Students' Self-Evaluation of Pre-service Practices in Nursery Schools and Kindergartens

MORI, Hideko
SHIMADA, Saichiro　AMADA, Hirokazu　KURASHINA, Miharu
SHIMODAIRA, Masae　ISHIZAKA, Yumiko　TOYA, Naoki

キーワード：　実習指導　自己評価　幼稚園教育実習　保育実習　施設実習

１．はじめに

保育者の養成課程でなされる教育において、実習は、学生が学校で学んでいる知識や技術と、現場での実践とを結びつけるものとして重要な位置づけにある。実践的指導力を身につけた保育者を求める声が年々高まる中、実習における実践経験の構築の重要性も強調されるようになってきており、実習の現場に学生を送り出す養成校が、その指導に当たって成すべき事は多い。

保育者の養成校である本校の学生は、２年間の在学期間中に数多くの実習を履修する。幼稚園教諭２種免許取得に必要とされる教育実習は、おおむね４週間行われる。また、保育士資格取得に必要とされる保育実習は、保育所での実習がおおむね４週間、保育所以外の児童福祉施設や社会福祉施設での実習がおおむね２週間行われる。本校では、これらの実習を下記の様なスケジュールで行っている。それぞれの実習期間はおおむね２週間である。

実習スケジュール

	実習場所	実習時期
１　教育実習	幼稚園	１年　11 月
２　保育実習	保育園または施設	１年　２月
３　教育実習	幼稚園	２年　６月
４　保育実習	保育園または施設	２年　７月
５　保育実習	保育園	２年　７～８月

上記スケジュールで学生は 5 回の実習を行う（１年次２月の保育実習の際に保育園で実習を行った学生は、２年次７月の保育実習では施設で行い、逆に１年次２月に施設で実習を行った学生は、２年次７月には保育園で行う。これらは、約半数ずつに分かれる）。

それぞれの実習において、事前指導、事後指導、また実習中には巡回訪問指導などが行われている。しかし、実習の指導はこの枠組みの中だけで行われるのではなく、通常の授業の中、あるいは日常の生活指導の中にも組み込まれ、指導に当たる我々は、常に実習が

より充実した学びの場になるよう数々の取り組みをしている。なぜならば、これらの指導は実習のための指導というばかりでなく、学生が保育者として現場に出た際に、即戦力となり得る実践力を培うための指導につながると考えられるからである。

２．問題と目的

学生は講義や演習、日常の学校生活の中で多くの事を学び、身につけていく。しかし、それを実践力に結びつけるためには、やはり実習を重ねる事が重要であり、その貴重な実習をより充実したものにするため、我々実習指導者は実習の実態について多角的に把握する必要がある。その方法の一つとして、実習後に学生に提出させている数々の報告を活用する事は、たいへん有効であると考えられる。

実習事後指導の中では、学生に実習報告書（資料２）、今後にいかすための報告書（資料３）、感想文・反省文などを提出させ、さらに何回かは口頭発表の形で下級生の前で報告を行わせてきた。また、教科ごとに実習内容の報告や反省をさせるような事もなされてきた。こういった一連の作業により、学生は様々なかたちで実習を振り返ることになる。その結果として、広汎で客観的な視点から自身の実習の実態をとらえ、内省を深めたり、気づかなかった自分の課題に気づいたりといった学習効果があがる事が期待される。そして、ここから得た見識は、次に続く実習での実践や、保育者として現場に出た際の実践に活かされるものとなるはずである。

前述のような実習後になされる数々の報告は、学生本人が実習を振り返るという意味ばかりでなく、我々指導者が実習指導に活かすための資料として、また保育・幼児教育の現場の状況を知る為の資料として活用されてきた。例えば、倉科(2009)は、学生の報告から園で実際に子どもたちに歌われている曲を調べ、それが15年間でどのように変化したかをまとめた。これは実習の実態把握という枠を超え、幼児期における音楽教育の実態を探るという観点からも、きわめて価値の高い研究であると思われる。このように、これまでも学生の報告はたいへん貴重な資料になって活かされてきており、中でも実習の報告書（資料２、資料３）は、実際に行われた実習内容の報告がなされているため、続く指導にストレートに反映させて有効活用されてきた。しかし、学生の内省報告にあたる感想・反省文は、自由記述形式であるため、心情をつかむ事はできても、なかなか科学的・客観的な分析ができなかった。また、このやり方では、学生自身も実習の中で印象的だった事柄ばかりを大きくとらえがちになり、多角的な視点からの内省が不足してくることが考えられた。

そこで、昨年度からは、実習の報告の中に学生自身による自己評価を加える事とした（資料１として添付)。この自己評価では、学生は様々な角度から実習を振り返り、自身の達成度を評定する。この事は、学生が実習を広汎かつ客観的な視点でとらえ直す際の手助けになる。例えば、「何度も指導案の書き直しをさせられ、活動自体も数多くの問題点を指摘された。自分は保育者には向いていない。」などと自信をなくしている学生が、他の点ではしっかりできていた事を認識して意欲を取り戻したり、逆に「子どもたちと毎日楽しく過ごせて充実した実習だった。」などと満足感に浸っている学生が、実は細かい部分では達成できていない面がたくさんあることに気づいたりする事ができるのである。また、自己評価と実習園からなされる評価のズレを認識する事で、メタ認知能力を高める効果も期待できる。これらの事は、続く実習における目標設定や、自身の課題点の明確化などにつながるものになると期待される。そして我々指導者も、学生の自己評価から、個々の学生の実習での様子を多角的視点からとらえられるようになり、より現実に即したきめ細やかな指導を行う事ができるようになると思われる。

実習における自己評価に関する研究はいくつか報告されている。大塚（2000）および大塚ら（2001）は、現場からの評価と自己評価の比較や、変化を調べ、実習指導に活用する方法を探っている。森（2003）は、幼稚園実習と保育園実習後の学生の自己評価を比較し、後から行われる実習の方が保育の技術面では自己評価が高まる事を確かめた。佐野（2010）

も２回の保育園実習後の自己評価を調べ、それが上昇することを見いだした。この研究では、自己評価と現場からなされる評価の差異も調べられ、「実習中の態度」に関する項目では差が見られなかったものの、「指導能力・援助能力」に関わる項目では学生の自己評価が現場からの評価より高い傾向が確認された。その前に行われた田中ら（2009）の研究でも、園からの実習評価と学生の自己評価を比較したが、ほとんどの項目で差がなく、学生の自己評価の方が園側の評価より低い項目も多かった。高橋ら（2011）は、実習における事前準備の習熟度と実習後の自己評価の関連を調べ、いくつかの側面で習熟度の高さと自己評価の高さに関係がある事を見いだした。この他にも、実習指導に自己評価を取り入れる養成校は多数存在すると思われるが、実習評価の在り方そのものに関しても議論が多い中、自己評価についての研究はまだその緒についたばかりといえよう。実習は複数回行われているのにも関わらず、時系列での自己評価の変化を追った研究は少ない。

そこで、本研究では、学生による実習の自己評価の変化にスポットをあてて分析する事により、より効果的な実習指導のあり方について考えていくこととする。なお、自己評価は、５回の実習すべてについて行われ、実習の回数を経るごとの評定値の変化を追う事ができるが、実習先が幼稚園、保育園、施設と異なるため、単純に５回の評定値を比較する事はあまり意味がないと思われる。しかしながら、幼稚園、保育園においては各々２回ずつ実習が行われているので、１回目と２回目の評定の差を比較する事は意味の有る事であろう。学習成果が現れ、学生が力をつけていれば、達成感も高まり自己評価評定値が伸びていることが予想される。そこで、本研究では次の仮説を立て、検証することとする。

仮説：幼稚園、保育園の実習における学生の自己評価評定値は、どちらにおいても１回目の実習より２回目の実習の方が高くなる。

３．方法

1）調査対象　　本校保育科 22 年度入学生　37 名

2）調査日時　　平成 22 年度から 23 年度に行われた 5 回の実習後
実習事後指導授業時間内（欠席した者は後に個別実施）

3）手続き　　自己評価調査用紙（資料１）を配布し回答させた
回答時間は約 5 分ほどであった

４．結果

自己評価の評定値は、十分に達成した＝5 点、かなりできたと思う＝４点、普通＝３点、まだまだ不十分＝２点、全くだめ＝１点と換算した。「実施せず」という回答は集計に含まなかったため、回答者数（n）が 37 名より少なくなっている項目がいくつかある。その数値は結果の表中に「n=　」というかたちで表示した。

幼稚園での教育実習（以降、幼稚園実習と表記）における評定値は、表 1 および図 1 のとおりである。また、保育園での保育実習（以降、保育園実習と表記）における評定値は、表２および図２のとおりである。幼稚園、保育園ともに、実習１回目と２回目の評定値の差について、被験者内１要因の分散分析による検定を行い、その検定結果もあわせて表１、表２に示した。なお、保育園での１回目の実習時期に関しては、１年次２月に実習を行った学生と、２年次７月に行った学生がほぼ同数ずつ存在する。同じ１回目といっても時期に開きがあり、結果にも差が出ることが予想されたため、別々に集計を行ない比較の検定したところ、10 項目全てにおいて、両群にまったく有意差がない事が確かめられた。よって、これらを併せて保育園実習１回目として処理することにした。

表１　幼稚園 教育実習自己評価評定値（平均値）

	1回目（SD）　n=37	2回目（SD）　n=37	差
1　評価表目標	3.2　(0.59)	3.6　(0.64)	F = 10.47 **
2　子どもとの関わり	3.6　(0.87)	4.3　(0.81)	F = 9.93 **
3　部分実習	2.6　(0.82)	3.1　(0.87)	F = 4.75 *
4　主活動	2.7　(0.94)	3.2　(0.83)	F = 3.26 +
5　ピアノ	2.6　(1.00)	2.6　(1.08)	F = 0.01 ns
6　指導案	2.7　(0.65)	3.1　(0.82)	F = 5.83 *
7　日誌･記録	3.4　(1.02)	3.5　(1.15)	F = 0.26 ns
8　社会的態度	3.5　(0.76)	3.9　(0.75)	F = 5.81 *
9　役割理解	3.4　(0.63)	3.8　(0.72)	F = 7.74 **
10　総合的評価	2.9　(0.65)	3.4　(0.84)	F = 6.06 *

+p ＜ 0.10　　*p ＜ 0.05　　**p ＜ 0.01

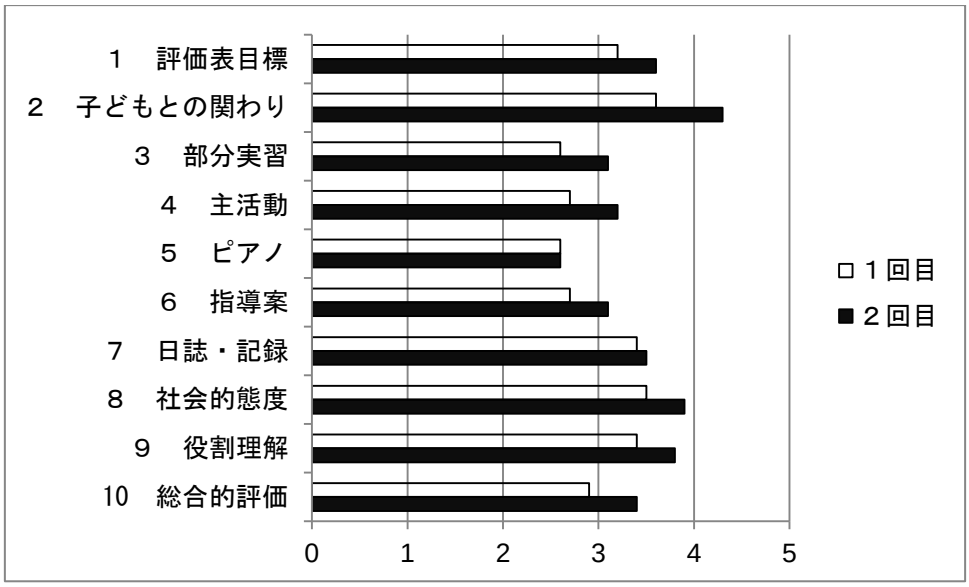

図１　幼稚園　教育実習自己評価評定値

表２　保育園　保育実習自己評価評定値（平均値）

	1回目（SD）	n=37	2回目（SD）	n=37	差	
1 評価表目標	3.6 (0.71)		3.7 (0.70)		F = 0.49	ns
2 子どもとの関わり	4.2 (0.74)		4.4 (0.78)		F = 2.01	ns
3 部分実習	3.3 (0.72)	n=28	3.5 (0.84)	n=31	―	
4 主活動	3.2 (0.96)	n=26	3.2 (0.85)	n=26	―	
5 ピアノ	2.9 (1.09)	n=16	2.9 (1.18)	n=17	―	
6 指導案	3.0 (0.76)	n=28	3.3 (0.77)	n=28	―	
7 日誌･記録	3.8 (1.03)		4.0 (0.10)		F = 1.09	ns
8 社会的態度	3.8 (0.85)		4.2 (0.75)		F = 4.98	**
9 役割理解	3.8 (0.83)		3.9 (0.80)		F = 0.30	ns
10 総合的評価	3.5 (0.68)		3.6 (0.87)		F = 0.12	ns

+p ＜ 0.10　　*p ＜ 0.05　　**p ＜ 0.01

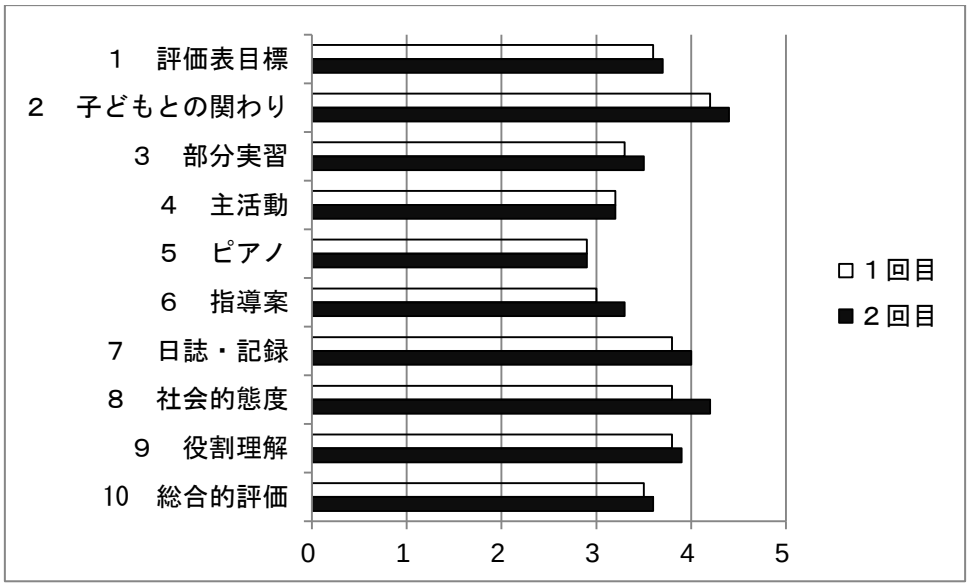

図２　保育園　保育実習自己評価評定値

表３　施設　保育実習　実習時期ごとの自己評価評定値（平均値）

	1年2月実施群 (SD)	n=20	2年7月実施群 (SD)	n=17	差
1 評価表目標	3.6 (0.76)		4.1 (0.56)		F = 5.24 ＊
2 子どもとの関わり	4.4 (0.67)		4.7 (0.47)		F = 3.37 +
3 部分実習	2.9 (0.69)	n=7	3.0 (ー)	n=1	ー
4 主活動	3.3 (1.53)	n=3	5.0 (ー)	n=1	ー
5 ピアノ	3.5 (0.71)	n=2	実施なし	n=0	ー
6 指導案	3.5 (1.29)	n=4	4.0 (ー)	n=1	ー
7 日誌･記録	4.5 (0.76)		4.3 (0.77)		F = 0.66 ns
8 社会的態度	3.9 (0.93)		4.2 (0.83)		F = 1.73 ns
9 役割理解	3.5 (0.89)		4.4 (0.51)		F = 13.99 **
10 総合的評価	3.5 (1.00)		4.1 (0.60)		F = 4.95 ＊

+p ＜ 0.10　＊p ＜ 0.05　＊＊p ＜ 0.01

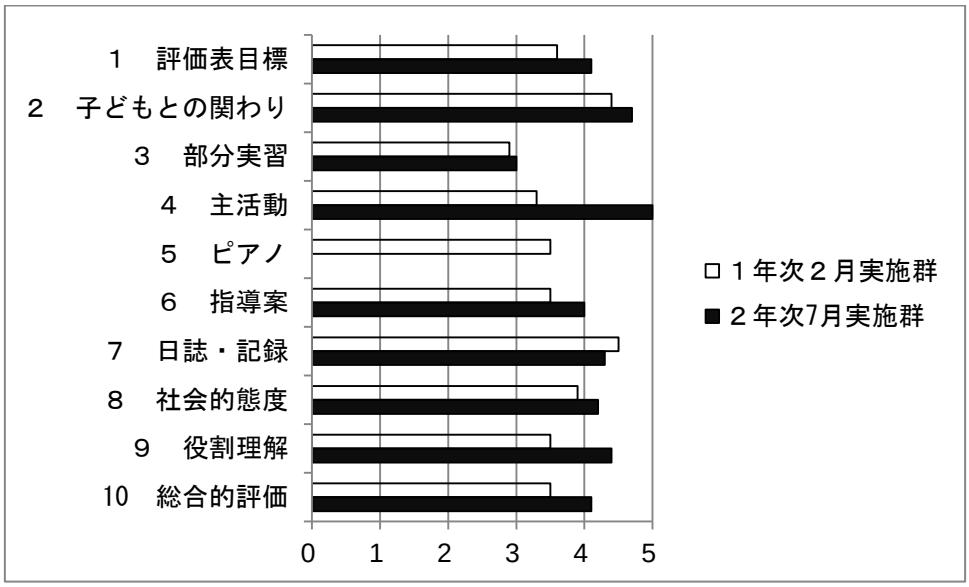

図３　施設　保育実習自己評価評定値

幼稚園実習においては、表１からわかるように、「評価表目標」「子どもとの関わり」「園の機能や役割の理解」の３項で１％水準、「部分実習」「指導案」「社会的態度」「総合的評価」の４項目で５％水準の有意差がみられた。このことから、１回目より２回目の方が自己評価の評定値が伸びている様子がはっきり示されていると言える。

保育園実習おいては、表２からわかるように４項目で検定が行われていない。これは、保育園での実習の中では、これらの項目に該当する活動が２回とも実施されたケースが少なかったため、被験者内検定が有効でないと考えられたためである。検定可能な６項目のうち、「社会的態度」のみが１％水準で有意に伸びを示した。有意差が出た項目は１つしかないが、ほとんど全ての項目で評定値は１回目より２回目の方が上がっており、傾向としては伸びている様子が見て取れる。

施設での保育実習（以降、施設実習と表記する）の結果は、表３および図３に示すとおりである。施設での実習は１度しか行われていないので、幼稚園、保育園のように１回目と２回目の比較を行う事はできない。しかしこちらは、保育園とは異なり、実習時期の違いによる評定値の差がいくつかの項目で有意に現れたため、両者を分けて集計した。表３には、実習時期の違いを要因とする被験者間の分散分析を行った検定結果もあわせて示した。

表３からわかるとおり、施設実習においても、４項目は実施されていないケースが多いために、両群（被験者間）の差の検定はなされていない。検定可能な６項目については、「役割理解」で１％水準、「評価表目標」「総合的評価」では５％水準で、２年次７月に実習を行った学生の方が、１年次２月に行った学生より評定値が高いことがわかった。

以上から、結果を要約すると以下のようになる。

結果の要約

１）幼稚園実習

多くの項目において、１回目より２回目の実習の評定値が有意に上昇した。これにより、学生の評定値が伸びていることが確認された。

２）保育園実習

１回目より２回目の実習の評定値が優位に上昇した項目は１項目にとどまった。しかしながら、ほとんどすべての項目の値が上昇していることから（図２参照)、こちらも１回目より２回目の方が伸びている傾向がみられる。

３）施設実習

実習は１度しか行われないため、幼稚園、保育園のように被験者内の伸びは調べられない。しかしながら、１年次２月に施設で実習を行った学生より、２年次７月に行った学生の評定値の方が有意に高い項目が３項目あり、実習時期が後になる方が、評定値が高くなることかわかった。

以上の結果から、仮説はほぼ検証されたと言える。

その他の結果

前述のとおり、仮説はほぼ検証されたが、もう少し別の観点から見ていく事とし、下記にいくつか結果として目立った事柄をまとめる。

・１回目と２回目を比較し、保育園実習ではさほどみられなかった評定値の伸びが、幼稚園実習では顕著に見られた事は、主として幼稚園実習１回目の評定値の低さに起因している。１年次 11 月に実施されたこの１回目の幼稚園実習は、その後の全ての実習に比べ評定値が低い。

・「ピアノ」に関して自己評定値が低く、１回目と２回目の間に伸びも全くみられなかった。

・「子どもとの関わり」に関しては、幼稚園、保育園ともに評定値が高い。特に２回目の実習においてはどちらもたいへん高い評定値を示しており、達成感が強かった事がわかる。

５．考察

１年次11月の幼稚園に始まり、２年次８月の保育園で終える計５回の実習で、学生の自己評価における評定値は伸びていく事が確かめられた。自己評価はあくまでも自身の達成感であり、必ずしも実際の達成度を示しているものではないが、教育場面においては、これが伸びたという事が持つ意味は大きい。達成感はいうまでもなく設定した目標と関わってくる。自己の能力とかけ離れた高い目標を設定しても、そこに到底及ばないとあってはモチベーションがわかず、結果として自己評価も低くなる。また、簡単にクリアできるような目標を設定しても、モチベーションは上がらず、効力感や達成感も得られない。学生の自己評価評定値が伸びたという事は、学生が自分の力を自己認識し、適度な目標設定を行い、そこへ向けて充分な努力をして手ごたえを感じられた事を意味する。従って、このように評定値が伸びたという事は、学校や実習での学びによる成果が反映されているものと考えられ、我々指導する側にとっても嬉しい結果である。

結果のところでも述べたように、幼稚園実習での顕著な伸びは、１回目の評定値の低さによるところが大きい。図１～図３でわかるように、幼稚園実習１回目の評定値は、後に行われた全ての実習に比べて低い。この実習が行われたのは、1年次前期の授業を終えて間もない時期であり、学生が習得している知識や技術の量はまだ少ない。また、幼稚園での１日観察実習やボランティア体験などはしているものの、現場での実践経験もほとんどない。従来から 1 年次の第１回目の実習における位置づけは、実習導入としての見学実習とか体験実習の意味合いがあり、学生側の実習に臨む構えもしっかりなされていないという実状である。ここで高い自己評価をするのは、むしろおかしいことであろう。実習園側の対応も「まだ１年生だから」といった感じでさほど厳しくないこともあり、実習中の学生もあまりつらそうな様子は見せないが、それだけに効力感や達成感も得られなかったのであろう。この後に続く 4 回の実習は、１年生の授業を全て終えた時期、さらに２年生になってから実施されており、学生は最初の実習に比べ多くの知識や技術を身につけているし、実習を重ねることで実践経験も積み上げ続けている。実習生に求められる力もだんだん厳しい内容になってくるため、本当に苦しそうに実習を続ける学生も多いが、その分、実習を終えた時の達成感も大きくなっていると考えられる。

ピアノに関しては、1回目から相対的にその評定値が低く、2回目にかけての伸びもみられなかった。このことに関して以下に考察を加える。

本校では、ピアノの個人指導に力を入れ、学生個々のレベルに合わせたきめ細やかな指導を行っている。毎週の個人指導では次回の授業時間までに到達すべき課題を提示し、学生は日々の練習でこの課題に取り組み、ステップアップを重ねていく。そのほかに、2年次５月には在校生や保護者、外部招待者を対象とした演奏会を行い、学生はそれに向けて長い準備時間をかけ練習をする。また、音楽の授業では「弾き歌い」を積極的に取り入れ、学生は弾き歌いができる曲をレパートリーとして数多く持つようになる。実習前には特にこの課題を厳しく設定し、学生が実習現場で数曲の弾き歌いが実施できるようになるまで指導をしている。

このような指導の結果、学生のピアノの能力は入学時より確実に伸びていく様子がうかがえるし、学生自身も力がついていく事は実感している。しかし、実際に園での実践において求められるピアノの力はかなりハイレベルなものであるため、多くの学生が「自信がない」と感じている。しかも、ピアノは正しく演奏できたかどうかを客観的に把握しやすい活動であり、失敗は即認識され効力感や自信が揺らぐ。たとえ完璧に弾ける曲であっても、それを園児の前で弾く際には、楽譜や鍵盤ばかりを見ているわけにはいかず、園児の様子を見ながら、また自分の表情にも気を配りながら行わなければならない。そういった

力は、やはり経験を重ねることで身につけられるものであり、まだ実践経験の少ない学生にとっては相当ハードルの高いものになってしまう。実際、緊張から実習内で失敗するケースも多く、十分な成功体験が得られないまま実習を終える学生も多い。

そういった事から、ピアノの自己評価はどうしても厳しいものとなりがちである。最初の実習では、まだ力もなく経験も少ないことから評定値が低いのは当然であるが、この時期の実習では、実習生に求められる力もさほど厳しいものではないため、大きな失敗経験もしないで済む学生が多い。しかし、2 年生になってからの実習、特に幼稚園実習では、初回の実習に比べて質的にも量的にもずっと高い水準の力を求められる。学生が 1 年次より基礎的な力を伸ばしていても、達成しなければならないハードルがそれを上回る勢いで高くなっているため、どうしても達成感を得ることは難しかったのであろう。

いずれにしても、音楽は園での主たる活動のひとつである事から、ピアノに関してはさらに基礎力、実践力を高めるべく、指導を強化していきたい。実践経験が実習場面だけでは不足している事も考えられるので、2 年次後期の実践演習の時間などを有効に使って、現場実践に近い形での経験を積ませることなども検討していきたい。また、ピアノの技術は個人の練習量によるところが大きいため、どうしても多くの課題を与えてクリアさせるという外発的動機づけ的な指導が中心になってしまう。ピアノを弾く事やその能力が上達する事を楽しいと感じ、ピアノの練習自体に充実感を持てるような、内発的動機づけによる練習を促進させる方法についても研究していきたい。

今回の一連の調査から、学生は学校での勉強や実習の経験を重ねることで、実習での達成感が高まり、自己評価が伸びることが確認された。また、自己評価を分析することにより、学生がどういった活動で自信を持ち、どういった活動では自信がないのかという事を把握することが可能となった。さらに、どういう面では力の伸びを実感し、どういう面で伸び悩みを感じているかなど、時系列の変化をつかむうえでも、自己評価は有効であった。本研究では、自己評価を学生全体像として分析したが、これは本来、個別指導に活かすためにも活用されるものである。指導に当たる側は、学生個々のプロフィールをきちんととらえ、課題点をみつけ重点的に指導したり、得意分野をさらに活かせるよう助言したりして、学生の力をつけさせていかなければならない。その意味で、実習自己評価の使用はたいへん有効であり、履修カルテに組み込んでさらに個々へのきめ細やかな指導に活かしていきたい。

６．今後の課題

今回作成した自己評価表は、まだ試作的段階であり、評価項目の因子分析なども行われていないものである。よって、必ずしも実習の自己評価表として妥当なものとは言えない。より実情に即した有用な自己評価表を作成したいと考えているが、そこには大きな問題が横たわっている。実習園からなされる現行の実習評価では、それに自己評価を対応させることが難しいと考えられるのである。

現在、実習園（幼稚園・保育園）からの評価は、「実習態度」「実習能力」「総合所見」の 3 項目について、自由記述で記入してもらう形で行われている。これは、長野市の養成校３校が共有して使用している書式であるが、このような自由記述の評価形式は全国的に見て少数派であると思われる。実習評価に関する研究は数多く報告されており（大塚 2000、大塚ら 2001、山田・森田 2007、松本 2008、廣瀬・千勝 2009、田中・辻野 2009、佐野 2010）、それらを見る限り、いずれも評価形式は５段階や A・B・C・D、優・良・可・不可など、客観的に把握できるものが使用されている。項目ごとの評価がこのように評定値というかたちで出され、さらに自由記述の所見や感想などの記入も加えられているものが一般的である。本校も施設実習においてはこれと同様な評価表を使用している（長野県の養成校が施設実習において共有で使用している書式である）。

学生自己評価は、基本的に園からの評価と対応させた項目でなされるべきである。対応させた両方の評価のズレから、学生は自分を客観視する事が可能になるからである。現在の自由記述形式の評価表でも、学生は自己認識とのズレを把握する事はできるが、そこには主観的解釈の入る余地が大きい。実習園からの自由記述でなされた評価を概観すると、全体的にバランスのよい記述となっており、評価者の苦心のあとがうかがえる。例えば、実習において優秀であったと思われる学生の評価では、良い面が多数箇条書きされるとともに、改善すべき所も必ず少し加えられている。逆に、優秀でなかったと思われる学生の評価でも、問題点がいくつか書かれると同時に、必ずほめるべき面が付け足されている。教育的配慮がなされた有意義な評価と言えるが、箇条書きである事から、基本的で大切な事柄もそうでない事柄も、ただ羅列されるかたちになり、養成校や学生の方も、解釈が難しいと感じる事が多い。自由記述の所見が大変重要なものであるには違いないが、評価の中で問題点を指摘されるにしても、「優」という評価がついた上でなされるのとそうでない場合では、養成校や学生の受け止め方は全然違ってしまう。こういった事から、やはり、自由記述だけの評価表には問題点が多いと思われる。実習の成績は、実習園側からなされる評価をふまえながら養成校がつけているが、評価に社会的責任を持たせる意味でも、現行の評価表は見直しの時期にきているのかも知れない。

現行の実習評価表は、長野市の養成校と幼稚園・保育園との間で長期間使われてきたものであり、見直しには双方の十分な意見交換やそれに伴う準備期間を要する。また、実習評価をめぐっては、全国的に活発に議論されており、評価というものが常に状況に合わせてその姿を変えていくべきであると考えられている事もわかる。本校においても、実習指導の在り方、評価の在り方ともに、常に状況を広い視点から把握しながら、改善を重ねていきたい。

＜引用文献＞

廣瀬久子・千勝真知子（2009）保育実習における学生の意識変化の考察：実習評価と自己評価を対照として　つくば国際短期大学紀要（37），13-22

倉科深陽（2009）幼児の音楽教育における歌唱研究：現場で歌われている幼児の歌の調査と考察（1993年～2008年）文化女子大学長野専門学校研究紀要　1，19-34

松本学（2008）教育実習・保育実習における学生二年間の学生評価の考察　国際学院埼玉短期大学研究紀要 29，57-80

森知子（2003）保育者を志す学生の自己効力感と実習評価の関連：保育者養成校における実習教育プログラムをとおして　臨床教育心理学研究　29,31-41

大塚健樹（2000）幼稚園教育実習評価と自己評価の比較：本学幼児教育科学生の場合　盛岡大学短期大学部紀要 10，27-32

大塚健樹・吉田恵子・斎藤修（2001）教育実習保育実習における実習評価と自己評価の比較　盛岡大学短期大学部紀要 11，19-23

佐野美奈（2010）保育所実習（保育実習Ⅰ）と保育実習Ⅱの実践的な学びによる教育的効果：2006年度から2008年度までの保育所実習（保育実習Ⅰ）と保育実習Ⅱの自己評価と現場評価の調査結果をもとに　大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要 9，203-217

高橋裕子・大瀧ミドリ・今村聡美（2011）幼稚園教育実習における事前準備の習熟度と事後の自己評価について：「教材研究」「子どもの気持ちの読み取り」「満足度」の観点から　東京家政大学研究紀要．1，人文社会科学 51，7-13

田中ゆき江・辻野順子・池田昭子・仲宗根稔（2009）縦断研究にみる保育実習ⅠとⅡの実習評価変動　関西女子短期大学紀要 18，1-10

山田達雄・森田真紀子（2007）幼稚園教育実習評価の妥当性と的確性に関する研究　中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要 39，141-153

資料１

実習を終えての自己評価

（　）番　氏名（　　）

実習園・施設名（　　）

以下の項目に関して、自己評価（自分自身での達成度・満足度の評価）をしてください。なお、この自己評価は成績には関係ありませんので、正直に回答してください。

１．　個人評価表の目標は達成できたか
（A・B・C・D・E　）
２．　子ども（入所者）とのかかわりは、多くできたか
（A・B・C・D・E　）
３．　部分実習について自分の達成度はどうか
（A・B・C・D・E・実施せず　）
４．　主活動についてはどうか
（A・B・C・D・E・実施せず　）
５．　ピアノ伴奏についての満足度はどうか
（A・B・C・D・E・実施せず　）
６．　指導案について達成度はどうか
（A・B・C・D・E・実施せず　）
７．　実習日誌・記録はしっかり書けたか
（A・B・C・D・E　）
８．　実習生としての社会的態度（礼儀、あいさつ、言葉遣い、時間厳守など）はどうであったか
（A・B・C・D・E　）
９．　園・施設の機能や役割における理解に関してはどうか
（A・B・C・D・E　）
１０．　総合的にみて、実習における自己の達成度はどの程度であったか
（A・B・C・D・E　）

A・・・十分達成した	B・・・かなりできたと思う
C・・・普通	D・・・まだまだ不十分
E・・・全くだめ	

資料２

実習報告書（幼稚園・保育園・児童福祉施設）

年　　月

文化学園長野専門学校　　年　　番　　氏名

期　間	月　　日～　月　　日（　　日間）		園名		
園長名		主任氏名		指導者名	
園へ提出したもの　○　で囲む	週案　　日案　　実習日誌　　記録等				
見学概要（施設オリエンテーション）					
主たる観察事項					
担当実習の状況					
その反省・感想					
実習を終わって					

資料３

次回の教育実習にいかすために　　平成　　年　　月
園名（　　幼稚園）
番号　　氏名
１　実際にした活動
・全日実習　　回
・全日実習以外（活動回数を記入）
朝の活動　　回　　昼の活動　　回　　帰りの活動　　回　　主活動　　回
手遊び　　回　　読み聞かせ　　回　　紙芝居　　回
２　指導していただいたこと
(1)　頂いた資料（　　で囲む）
実習中の予定　楽譜　週案　日案見本　時案見本　その他（　　）
(2)　入らせていただいた年齢　・年少　　日　・年中　　日　・年長　　日
・その他（　　）
(3)　主活動で事前にご指導いただいた回数（時間）およびその概要
３　園を出た時刻
・一番早かったとき　　：　　・一番遅かったとき　　：　　・平均　　：
４　実習園への要望

保育者養成課程におけるダンス教育の評価

－２種類の「リズム性が豊かなダンス」の指導順序の質問紙調査から－

石坂　由美子

An Evaluation of Dance Lessons in Nursery Education Curriculum: A Questionnaire Study on the Lesson Order of Two Types of Rhythm Rich Dances

ISHIZAKA,　Yumiko

キーワード：カリキュラム、リズムダンス、ボールルームダンス

はじめに

幼児教育を志す学生たちには、ダンスの学習（授業名は表現Ａ指導法）を進める上で、ダンスのそれぞれの種目が持つ欲求充足の機能的特性を味わってほしいと願っている。そこで、その機能的特性を明確にするために、ダンスを、「リズム性が豊かか、イメージ性が豊かか」また、「決められた型があるか、決められた型はないか」で、表１（佐伯 1983）のように４つに大分類した。その中の（　）内のように小領域を選定し、少なくても４領域の特性は味わってほしいと願ってカリキュラムを編成している（この分類についての詳細は、本校紀要第２号：島田、石坂 2010　に記載）。

表１　ダンスの欲求充足から見た４分類

	４分類	大領域	（小領域）
Ⅰ	リズム性が豊か　－決められた型がない	リズム型	（リズムダンス）
Ⅱ	リズム性が豊か　－決められた型がある	社交型	（ボールルームダンス）
Ⅲ	イメージ性が豊か－決められた型がある	民舞型	（民踊）
Ⅳ	イメージ性が豊か－決められた型がない	創作型	（創作ダンス）

研究の目的

今までの表現Ａ指導法の授業では、従来のダンスカリキュラム研究（島田 2005）にのっとり、これらのダンス小領域を、Ⅰ～Ⅳの順番に並べて実施してきた。しかし、その根拠は学術的に証明されているものではなく、経験によるものであって、しかもその経験もデータの蓄積があるものではなく、感覚に頼るところが大きかった。従来のカリキュラムの並べ方は、下記に示したものである。

従来の並べ方：①リズムダンス→②ボールルームダンス→③民踊→④創作ダンス

リズムダンスには決められた型がないために、音楽リズムにのって心身をほぐすには打って付けの内容だと考えられてきた。経験の乏しい学生たちには、まず身体で音楽リズムにのる楽しさを味わわせることが大切である。そのためには、自分の好き勝手に、動きの拘束がないリズムダンスは、最初に取り扱うダンス領域として適当であると考えられていた。

しかし一方で、自由に踊ることの恥ずかしさから、かえってリズムダンスではのれないのではないか、型があるボールルームダンスの領域から導入した方がよいのではないかという考え方もあった。

そこで、本研究では、リズム性が豊かなダンスであるリズムダンスとボールルームダンスについて、従来通りの順序「リズムダンス」→「ボールルームダンス」で配列した場合と、逆に「ボールルームダンス」→「リズムダンス」と配列した場合とでの相違をみようと考えた。

研究の方法

2 年間かけて、「リズムダンス」と「ボールルームダンス」についてその順番を入れ替えてダンスの学習を実施し、アンケートによる意識調査を行い、その比較で興味・関心や欲求・意欲の差を検証する。

22 年度入学生　①リズムダンス→②ボールルームダンス（これをカリキュラム１とする）

23 年度入学生　①ボールルームダンス→②リズムダンス（これをカリキュラム２とする）

なお、リズムダンスの領域からは、「ユーロビート」を 2 コマ（4 時間）、ボールルームダンスの領域からは「チャチャチャ」を 2 コマ（4 時間）実施する。

研究の仮説

リズムダンスから入るカリキュラム 1（H22）の方は、学習がスタートすると同時に心身がほぐれ、より早い段階でダンスに対する興味・関心や欲求・意欲が沸くであろう。また、活動も豊かになると思われる。

一方、ボールルームダンスから入るカリキュラム 2（H23）は、型の習得に意識がいき、そのために活動が停滞したり、習得困難になったりすると、ダンスに対する興味・関心が薄れるかもしれないし、活動量も減るだろうと思われる。

研究の手順

(1) 高校までのダンス経験で（「本校でのダンス学習」の実施前のレディネス調査、資料１）、どんな興味・関心や意欲・意欲を持っているか、22 年度と 23 年度を比較する。
(2) その違いを踏まえた上で、毎時間の終了時に興味・関心、欲求・意欲に関するアンケート調査を行い、それぞれの授業の観察と考察を実施する。
(3) H22 のダンス学習と H23 のダンス学習のアンケート調査における違いを考察する。

研究の内容及び結果

１　授業開始前の学習者のレディネス調査（アンケート）

（1）　調査内容（資料１）

※本研究と無関係な質問、回答は省略している。

資料１　表現の授業に関するアンケート調査

保育科１年＿＿番氏名＿＿＿＿＿＿＿＿

※　このアンケート調査は、表現（主としてダンス）における全学生の実態を把握し、今年度の授業展開を考える上での資料とすることを目的としています。全てに正直に回答（解答）して下さい。

Ⅰ　ダンスに対する興味・関心、欲求・意欲　3択で回答すること。
＜興味・関心＞（3→大好き、2→普通、1→嫌い）
＜欲求・意欲＞（3→やりたい、2→普通、1→やりたくない）

全般的なこと
具体的なこと
1　明るく軽快な曲で音楽のリズムに合わせ、体を動かしたり踊ったりする。
2　色々な曲で、音楽のリズムに合わせて、体を動かしたり踊ったりする。
3　曲に合わせて、パターンを決めずに自由に踊る。
4　曲に合わせて、自分でパターンを作って踊る。
5　曲に合わせて、あらかじめ決められたパターンを覚えて踊る。
6　一人（ソロ）で踊る。
7　グループになって踊る。
8　フォークダンスあるいは社交ダンスの様に、人と組んで踊る。
9　知っているフォーク（社交）ダンスを数多く踊る。
10　知っているフォークダンスを、衣装を身につけたりしてきれいに踊る。
11　知らないフォーク(社交)ダンスに挑戦し、沢山の曲で踊れるようになる。

Ⅱ　ダンス経験　3択で回答すること。
（3→沢山経験、2→多少経験、1→経験なし）
1　演劇やダンスなどでの変身経験の有無。
2　リズムやイメージへの陶酔（のる）経験の有無。
3　グループではなくて、ひとり(ソロ)でダンスを発表した経験の有無。
4　リズムにのって踊るリズムダンス(ヒップホップなど)の経験の有無。
5　フォークダンスや社交ダンスの経験の有無。

Ⅲ　ダンス技術の習得状況（技能レベル）　5択で回答すること。
（5→レベル高い、4→レベルやや高い、3→レベル普通、2→レベル低い、1→経験ない）
1　人前でも踊れるか。
2　リズムダンス（ヒップホップダンスなど）で。
3　フォークダンスまたは社交（ボールルーム）ダンスで。

(2) 授業開始前の学習者のレディネス調査（アンケート）の結果と考察

全学生のダンス経験の実態を知り、授業を展開していく手立てを考えるために、アンケートを配布し、回答を求めた。表２から表７までは、アンケート結果と結果からみられる実態をまとめたものである。

表２　①　ダンス全般に関する興味・関心、欲求・意欲（3点満点で回答）

※資料１のⅠ（1～11）の質問からダンス全般における興味・関心、欲求・意欲についてみることにした。

Ⅰ全体	興味・関心	欲求・意欲	平均
22年度	2.5	2.6	2.6
23年度	2.5	2.3	2.4

本校での学習が始まる前の段階で、色々な領域や種目があるダンス全般に対する興味・関心や欲求・意欲の状況を把握しようとした。興味・関心は両学年とも変わらないが、欲求・意欲においてはH22の方が0.3上回り、従って興味・関心、欲求・意欲の平均値はH22の方が、0.2上回っている。

表３　②　リズム型ダンスに対する興味・関心、欲求・意欲（3点満点で回答）

※資料１のⅠ（1～5）の質問からリズム型ダンスに対する興味・関心、欲求・意欲についてみることにした。

Ⅰリズム	踊る		多曲		自由		作る		既製		平均
22年度	2.8	2.7	2.7	2.6	1.8	1.9	1.6	1.8	2.7	2.6	2.3
23年度	2.5	2.4	2.5	2.4	1.9	1.8	1.8	1.7	2.5	2.5	2.2

リズムに合わせて踊ることの興味・関心は、H22の方がH23より数値が高い。授業を展開していく中でH22の学生の方がリズムダンスにおける欲求・意欲が高まるのではないだろうかと予想される。また、全ての質問についてH22とH23を比較してみると、H23の方が数値が低い。このことから、リズムダンスに対する興味・関心、欲求・意欲が低いことがわかるため、授業の導入にあたっての工夫が必要になるだろう。

「色々な曲で、音楽のリズムに合わせて体を動かしたり踊ったりする（多曲）」ことや「曲に合わせて、あらかじめ決められたパターンを覚えて踊る（既製）」ことへの興味・関心については高い数値を示しているが、「曲に合わせて、パターンを決めずに自由に踊る（自由）」や「曲に合わせて、自分でパターンを作って踊る（作る）」についてはどちらも低い数値を示していることから、一人で踊ることやダンスを創作することへ抵抗を感じている学生が多く、リズムダンスの特性に触れた楽しさを経験している学生が少ないことがわかる。

表４　③　学習の形態に対する志向（3点満点で回答）

※資料１のⅠの（6、7）の質問から一人で踊る（ソロ）ことと友だちと一緒に踊る（グループ）ことの興味・関心、欲求・意欲についてみることにした。

Ⅰ形態	ソロ		グループ		平均
22年度	1.4	1.2	1.4	1.2	2.0
23年度	1.3	1.3	1.3	1.3	1.9

H23においては、「一人で踊る（ソロ）」こと、「友だちと一緒に踊る（グループ）」ことに差は見られなかったが、H22では、興味・関心はあるものの、欲求・意欲は数値が下がっていることから、ダンス全般においてその楽しさを経験している学生が少ないことが予

想される。

表５　④　社交型ダンスに対する興味・関心、欲求・意欲（3点満点で回答）

※資料１のⅠ（8～11）の質問から社交ダンスに対する興味・関心、欲求・意欲についてみることにした。

Ⅰ社交	組んで		多く		綺麗		沢山		平均
22 年度	2.2	2.2	2.1	2.1	2.0	2.3	2.1	2.1	2.1
23 年度	1.9	2.0	1.8	2.0	1.9	2.1	2.1	2.2	2.0

社交ダンスに対する興味・関心、欲求・意欲と、表４のリズムダンスの場合とを比較してみると、社交ダンスに対する興味・関心、欲求・意欲の方が低いことがわかる。フォークダンスや社交ダンスなど、人と組んで踊ることの経験が乏しいのだろうか。また、H23 は H22 と比較してみても、全体的に数値が下がっている。学生のコミュニケーション能力や、学級内の雰囲気に関係しているのか、今後、見極めていく必要があると思われる。

表６　⑤　ダンスの経験について（3 点満点で回答）

※資料１のⅡ（1～5）の質問からダンスの経験についてみることにした。

Ⅱ経験	変身	陶酔	ソロ	リズム	フォーク
22 年度	1.6	1.4	1.1	1.6	1.5
23 年度	1.4	1.4	1.0	1.7	1.4

全体的に数値が低く、ダンスの経験を積んできた学生が少ないことがわかる。ソロで踊ったことがある学生は限りなくないに等しい。ダンスに対する興味・関心、欲求・意欲はあるものの（表４、表６）今まで、その楽しさを経験することが少なかったと思われる。

表７　⑥　ダンス技術の習得状況について（5 点満点で回答）

※資料１のⅢ（1～3）の質問からダンス技術の習得状況についてみることにした。

Ⅲ技術	見られ	リズム	フォーク
22 年度	2.9	2.6	1.4
23 年度	2.9	2.5	1.5

創作ダンスやリズムダンスの習得を感じている学生はやや多いが、フォークダンスやボールルームダンスの技術の習得を感じている学生は少ない。

全体を通しての考察

ダンスの学習がスタートする前に実施したアンケート調査から、経験が乏しいこと、たとえ経験したとしても、ダンスの楽しさに触れた（特性を味わう）活動が活発に行われていたとは考えられないことが予想される。経験の乏しさから特性に触れた活動がなされていないために、ダンスのよさを味わっていない。

ダンスに対する興味・関心、欲求・意欲については数値が高いので、授業の導入を工夫していくことで、ダンスの特性に触れた楽しさを味わうことができるのではないだろうか。

２　平成 22 年度ダンス学習授業と平成 23 年度ダンス学習授業のアンケート調査

（1）　平成 22 年度の授業の経過

＜H22 年度リズムダンス＞

リズムダンスの 2 回（4 時間）の授業終了後、リズムダンスに関する以下のアンケート調査（資料２）を行い、集計をした数値からどのような結果が得られたか検討した。尚、アンケートは学生が自己評価したものである。

資料２　リズムダンスの授業終了後　アンケート調査

＜アンケート内容＞
① リズムダンスを楽しいと思うことができたか？（興味）
② 音楽リズムにのって踊ることができたか？（のり）
③ 色々な動きで動くことができたか？（動き）
④ 汗をかくくらい、たくさん動くことができたか？（汗）
⑤ 友だちや周りを気にせず恥ずかしがらずに踊ることができたか？（恥）
⑥ もっと踊りたいという欲求を持つことができたか？（欲求）

表８　「リズムダンス」アンケート結果

（5 点満点で回答）①→1 コマ目終了後　②→2 コマ目終了後

	興味		のり		動き		汗		恥		欲求	
回数	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②
平均	3.6	3.7	3.6	3.9	3.5	3.9	3.2	3.9	3.5	3.6	3.3	3.4

初めてのダンス授業がリズムダンスであった H22 学生の、リズムダンスに対する興味、のり、恥、欲求などの心的な傾向については、1 コマ目と 2 コマ目を比較すると、微増（0.1～0.3 増）にとどまるが、動き、汗の運動量の項目からは 2 コマ目には大きな変化（0.4～0.7 増）がみられる。活動量が増えたことがわかる。授業回数を重ねることで、体を動かすことを楽しむことができている。

＜H22 年度ボールルームダンス＞

ボールルームダンスの 2 回（4 時間）の授業終了後、ボールルームダンスに関する以下のアンケート調査（資料３）を行い、集計をした数値からどのような結果が得られたか検討した。尚、アンケートは学生が自己評価したものである。

資料３　　ボールルームダンスの授業終了後　アンケート調査

＜アンケート内容＞
① ボールルームダンスを楽しいと思うことができたか？（興味）
② 音楽リズムにのって踊ることができたか？（のり）
③ シャッセを取り入れて、踊ることができたか？（動き）
④ マナーを守って楽しむことができたか？（マナー）
⑤ もっと踊りたいという欲求を持つことができたか？（欲求）

表９「ボールルームダンス」アンケート結果

（5 点満点で回答）①→1 コマ目終了後　②→2 コマ目終了後

	興味		のり		動き		マナー		欲求	
回数	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②
平均	3.6	4.3	3.8	4.5	3.6	4.4	4.0	4.0	3.5	4.1

マナーについての項目以外からは、数値が大幅に上がっている（0.6～0.8 増）ことがわかる。リズムダンスを経験してからのボールルームダンスであったため、初めて行うボールルームダンスに対しても抵抗を感じることなく、その楽しさを感じることができたのではないか。マナーに関しては、女子校であるために異性間の抵抗がないためか、また、保育科に集まる学生の特質からか、はじめから 4.0 という高得点をマークしている。

(2) H23（2 年目）年度の授業の経過

＜H23 年度リズムダンス＞

リズムダンスの 2 回（4 時間）の授業終了後、リズムダンスに関する上記のアンケート調査（資料２）を行い、集計をした数値からどのような結果が得られたか検討した。尚、アンケートは学生が自己評価したものである。

表 10　「リズムダンス」アンケート結果

（5 点満点で回答）①→1 コマ目終了後　②→2 コマ目終了後

	興味		のり		動き		汗		恥		欲求	
回数	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②
平均	3.4	3.6	3.6	3.6	3.4	3.4	3.6	3.6	3.2	3.5	3.1	3.4

ボールルームダンスを経験してからのリズムダンスであった。のりでは変化がみられなかったものの、興味、恥、欲求などの心的傾向の項目からは微増（0.2～0.3 増）が認められた。動き、汗の運動量の項目については授業回数が増えても数値に変化はみられなかった。

＜H23 年度ボールルームダンス＞

ボールルームダンスの 2 回（4 時間）の授業終了後、ボールルームダンスに関する上記のアンケート調査（資料３）を行い、集計をした数値からどのような結果が得られたか検討した。尚、アンケートは学生が自己評価したものである。

表 11　「ボールルームダンス」アンケート結果

（5 点満点で回答）①→1 コマ目終了後　②→2 コマ目終了後

	興味		のり		動き		マナー		欲求	
回数	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②
平均	4.0	4.0	3.9	4.1	3.6	3.9	3.9	4.0	3.5	3.8

はじめてダンスの学習をしたにも関わらず、ボールルームダンスに対する興味は初めから高くそのまま推移している。のりや欲求に関しては 0.2～0.3 の増で、5 段階評価で、それぞれ 4.1、3.8 となり、かなり高まっている。また、動きに関しても 0.3 の増で 3.9 とかなり高い評価となっている。

(3) H22 年度と H23 年度の比較

表 12　＜リズムダンスの比較＞

	興味		のり		動き		汗		恥		欲求	
回数	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②
H22	3.6	3.7	3.6	3.9	3.5	3.9	3.2	3.9	3.5	3.6	3.3	3.4
H23	3.4	3.6	3.6	3.6	3.4	3.4	3.6	3.6	3.2	3.5	3.1	3.4

授業開始前のアンケート結果から、H22 の方がリズムダンスに対する興味・関心、欲求・意欲が高かったので、授業（カリキュラム１）を展開していく中で大きな変化がみられるだろうと予想していたが、興味、欲求について大きな変化はみられなかった。また、H23 は授業前のリズムダンスに対する興味・関心、欲求・意欲の数値が低くかったが、授業（カリキュラム２）を展開していく中で差がでてきた。のり、動き、汗の項目では、H23 は変化がみられなかったが、H22 では数値の変化がみられた。

表 13　＜ボールルームダンスの比較＞

	興味		のり		動き		マナー		欲求	
回数	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②
H22	3.6	4.3	3.8	4.5	3.6	4.4	4.0	4.0	3.5	4.1
H23	4.0	4.0	3.9	4.1	3.6	3.9	3.9	4.0	3.5	3.8

H23 のボールルームダンスに対する興味やのりは 4.0 と初めから高いことがわかるが、授業回数が増しても数値に変化はみられない。H22 は H23 より数値は低いものの、その変化は 0.7 増とボールルームダンスに興味をもつ学生が増えたことがわかる。今までフォークダンスやボールルームダンスなど「人と組んで踊ること」の経験があまりなかった学生が多かったが、経験することにより、その楽しさを味わっていることがわかる。

のり、動きでは H22 の数値の差が 0.7～0.8 上がっている。H23 では初めからのりの項目は高く、更に 0.2～0.3 上がっている。

授業前のアンケート結果から、ボールルームダンスに対する興味・関心、欲求・意欲が低いことがわかっていたが、授業回数が増えると欲求・意欲については 3.5～4.1 と高い数値がでてきた。

研究のまとめ・今後の課題

リズムダンスから授業を展開していく方が、よりダンスの特性を感じながら楽しむことができるのではないかという仮説を持ち授業を展開してきたが、学生によるアンケート結果を比較検討したところ、リズムダンスから入った授業でもボールルームダンスから入った授業でもそれぞれのダンスに対する興味や欲求、また活動量に大きな数値の差はみられなかった。このことから、学生がダンスの欲求充足の機能的特性を味わうためには「リズム性が豊かなダンス」という側面から見た場合、カリキュラム（順序や配列）の問題ではないことがわかった。

従って、学生がのって楽しめる要素としては、カリキュラム（順序や配列）よりは、教師の指導活動や学生の周りの環境（友だち関係、学級の雰囲気など）の方が、大きく影響

しているように思う。

本研究では、「リズム性が豊かなダンス」のリズムダンスとボールルームダンスにおける比較を行ったが、「イメージ性が豊かなダンス」である民舞型・創作型との比較をするとその違いが出るかもしれない。リズム性が豊かなダンス、イメージ性が豊かなダンスを比較検討することが、授業を組み立てる上で参考になるかもしれない。

また本研究は、アンケート調査による学生自身の自己評価によるもので比較検討を行ったが、更に、客観的に観測できる具体的な動きやステップなどの変化（数や大きさ）を比較検討し、学生がダンスの楽しさを味わえるような授業展開ができるようにしていきたい。

文献

佐伯年詩雄他　(1983)　つみかさね　第 28 回全国体育学習研究協議会福岡大会研究紀要　24－28

島田左一郎　(2005)　つみかさね　第 50 回全国体育学習研究協議会長野大会研究紀要　44－50

島田左一郎・石坂由美子　(2010)　リズムダンスの導入のあり方　文化女子大学長野専門学校研究紀要，第 2 号，3-18

児童に対する養護観の歴史的展開について

竹前　健治

Historical Perspectives on the Child Protection

TAKEMAE,　Kenji

キーワード　：　養護観　児童観　ルソー　石井十次　コルチャック

Ⅰ　はじめに

児童に対する養護観は、児童をどうとらえどう考えるかといった児童観の根幹に触れるものであり、児童福祉で展開される仕組みや制度、サービスの中身など福祉の在り方に大きく影響していく。

家庭養護はもちろんのこと、社会的養護である施設養護、保育や里親の養育など時代と共にそのあり方が変わってきている。そうした歴史的展開における児童の養護観の変化と現状の福祉的な展開を見ながら、あるべき姿を探って考察を加えてみたい。

2　児童養護の歴史

1）西欧の児童養護

(1) バーナード・ホーム

イギリスの宣教師トーマス・ジョン・バーナードによって 1870 年に設立された浮浪児童のための入所施設が「バーナード・ホーム」である。医療伝道者として中国に渡る意思を持って勉学中、大勢の浮浪児たちと出会ったのがきっかけとなって、児童の収容保護に献身するようになる。イギリスでの孤児院の存在は、これに 70 年ほど先立つ 1741 年に「ロンドン孤児院」が公的な施設で設立されていたが、バーナード・ホームは従来の大舎制をやめ、小舎制で運営され、里親斡旋、職業教育など先駆的活動を施設で行い、世界の児童養護施設のモデルとなった。

(2) ルソーの児童観・教育観

ジャン＝ジャック・ルソー（1712~1778）はスイスのジュネーヴで生まれフランスで活躍した思想家であり、哲学者である。彼の自由平等の思想はのちのフランス革命にも大きな影響を与えることになる。児童観・教育観を示すものには、『エミール』があるが、自分

の子どもを孤児院に預けた実際的な体験の間で後悔や批判の矢面に立たされることになる。

『エミール』の中で述べられている子ども観を見てみると、当時は幼年時代、少年時代また、青年時代は大人になるための段階と見ていたが、そうではなくそれぞれの時代は独自の価値を持たねばならないとし、理性の未熟な少年期にも独自の価値を与えている。子どもは親の付属物とみられ、親の都合により犠牲にされるなど、子どもの人権が認めてもらえず、大人のような一人前の人格を持った権利者とはみなされなかった時代の中で、このような考え方になったのは、ルソー自身の子を孤児院に捨てた体験に対する懺悔の気持ちが込められて、確立していったものと思われる。

子どもの生きる権利や可能性を見つめ、自然の教育や発達の道筋を論じていて、生活環境、教育環境が大事としている。実際のルソーの子育てにおいては、彼の生い立ちや生育環境があまりにも不遇で温かな家庭環境を築くことができなかった影響のため。実際面で証明することができずに終わっている。

(3) ペスタロッチの教育

ヨーハン・ハインリッヒ・ペスタロッチ（1746~1827）はスイスのチューリッヒで生まれ、貧民や孤児に対する施設における養育や教育を行い、とくに、イヴェルドン学園での教育は当時のヨーロッパでその名が広がり、視察に訪れるものが多く、各国の教育者に大きな影響を与えた。

ペスタロッチは貧民や孤児の教育を、シュタンツ、ゲルトルートの地に関わり、さらにイヴェルドンの学校に力を入れる。孤児院活動やその趣旨については『シュタンツだより』に詳しく述べられているが、もっとも貧困な児童の教育の重要性を強調している。彼の教育方法は「メトーデ」と呼び、その方法は単純化ないし簡略化し、民衆の子どもたちに直観に基づく適切な概念内容（言語）を与えるものであった。さらに、子どもの周囲の世界は自然界だけではなく、子どもは自然界を直視し、認識すると同時に、人間認識や社会認識の言語化されていない子どもたちが、人間の社会（道徳や宗教の世界）をも直視し、認識する必要があるとしている。この「メトーデ」の評判は国際的なものになり、イヴェルドンの学校は教師の養成ないし、教師の現職教育の機能を持つ、教師養成学校の付属実習学校になっていく。

彼の宗教観は『隠者の夕暮』からも見られるように、単なる自然宗教的なものでなく、宗教改革の根本精神に通じる要素があった。自らの力を信じ人生を送り、自分の力に信用が及ばないときは静かに振り返り、神に祈るという生き方であった。自然の道とは無理や圧迫がない充実した生活の道であり、自然による教育とは無理なくしかも充実した教育で、常に真実の幸福を伴うものである。

彼の人間観は自然本性の考え方に疑問を持ち、教育を必要としている。ルソーの「エミール」で展開している、人間の本性は善であり、自然のままに育つと立派な人に育つという考え方（消極主義の教育論）には異を唱えている。人間は野生のまま成長するに任せて

おくと、本来怠惰で無知、無分別で危険や自己の弱点を通じて、向う見ずな残忍なものになる。このような本質的な面を持つ人間だからこそ、動物の段階にとどまらず人間になるべきであるとすれば教育が必要であるとしている。

ペスタロッチの養護観を見るとき、次の提言が記録されている。当時スイスの社会問題の一つとして、未婚の母が自分で産んだ子供を殺すという事件が頻発していた。ペスタロッチは殺人行為をする少女の行為のみに目を奪われるのでなく、原因を見るべきとした。すなわち少女が子を殺すのは絶望のためで、不実な男にだまされて不幸を背負い絶望に至ったことを考えると、少女をだました男にこそ罰則を向けるべきとして少女の保護策を提言している。

ペスタロッチはフランス革命やルソーの影響を大きく受けている。革命に対する立場は、人民の側に加担した積極的関与については一線を画し、教育による国家改造を目指していた。

(4) フレーベルの児童観

フリードリッヒ・フレーベル（1782~1852）はドイツチューリンゲン地方のオーベルワイスバッハに生まれる。

ペスタロッチのイヴェルドン学校は 1805 年から約 20 年間全欧州の教育界の中心になったが、若き教育者のフレーベルは 2 週間だけの教育を受け、すっかりペスタロッチに心酔してドイツに帰り、その教えをドイツに広めることになった。

フレーベルの教育思想は幼児の教育を中心に家庭を重んじた教育であったが、次第に家庭以外の特殊の施設としての幼稚園教育に傾斜していった。これはフレーベル自身家庭の温かな雰囲気をほとんど味わわずに育ったことと関係すると思われる。母は、彼の生後十か月目に亡くなっていて、三歳の時迎えた継母とフレーベルとの心のつながりは、極めて薄かった。父は牧師であったが、仕事に忙殺され、家庭を顧みる余裕をほとんど持たなかったからである。

(5) エレン・ケイの児童観

エレン・ケイ（1849~1926）はスウェーデンの社会思想家で『児童の世紀』を出版して、子どもが幸せに育つことのできる平和な社会を築くべきとし、20 世紀を児童の世紀と主張した。それまでの大人の恣意的で抑圧的な児童処遇を厳しく告発し、児童の人権思想を高めた。

(6) モンテッソーリの障害児教育

マリア・モンテッソーリ（1870~1952）はイタリヤ生まれの医師であり教育者である。彼女の教育思想はモンテッソーリメソッドと呼ばれ、とくに障害児教育として子どもの教育に影響を与えている。このきっかけになったものに、ローマのスラム街に「子どもの家」

と名づけられた教育施設があり、それに参画し教育の実践がなされてきたが、子どもに対する自由の尊重がその教育思想であった。子どもは本来、自らを成長させようとする力（衝動）を秘めており、その力にもとづいて自己発達、自己形成を遂げようとするものである。つまり成長への力に基づいて自己発達を遂げると説いている。

(7) コルチャックの児童養護

ヤヌシュ・コルチャック（1878~1942）は、ポーランド人で医師であり作家である。子どもの養護を実践する中で、特に子どもの人権や権利について強力に主張し、ナチスのユダヤ人迫害に対しても、自身ユダヤ人でもあることから、子どもたちがユダヤ人収容所のガス室に送られる時にその行動を共にしたことで知られている。

コルチャックは社会の底辺にある子どもたちに温かい手を差し伸べてきた。ユダヤ人の子どもたちの「孤児たちの家」とポーランド人の子どもたちのための「僕たちの家」の二つのホーム（教育施設）をつくり、30年間子どもたちと生活を共にした。「ホーム」の生活の中で子どもを中心にした生活を展開し、子ども議会や裁判の制度を取り入れている。また、コルチャックは子どもたちを対象とした子ども新聞の発行にも力を入れている。子ども向けの物語などの著述活動や連続ラジオ番組にも「老博士のお話」で登場するなど、子どもを中心とした生活の展開を考えていて、とくに『子どもの権利の尊重』を執筆するなど子どもの目線から見られてきた子どもの権利擁護を主張している。

コルチャックの子ども観は、子どもは明日の人間、未来の市民という考えでなく、今日を生きる権利があるとするもので、扶助され保護の対象であった子どもから、個々の子どもの主体的な権利を保障する自己実現を目指すものであった。

(8) マザー・テレサの児童観

マザー・テレサ（1910~1997）は18歳で修道女会に入り、テレサという名の修道女となる。その後インドのカルカッタのスラムで人種も宗教も超えて活動を始め、貧しい人々の為に自分の人生を捧げた女性である。

子どもの家、カルカッタの子どもたちの家「シシュ・バヴァン」は事実上の孤児院であり、出生時に最終的に見捨てられた子どもたちを多く受け入れている。極貧のため、あるいは恥のため捨てられる子どもたちは世界中にいる。インドでは、その上、家族の圧力のせいで未婚の母や若い未亡人が、子どもを余儀なく捨てるのである。ジュルジュ・ゴルレ、ジャン・バルビエ（1985）によると、マザー・テレサは捨てられた子どもたちを孤児院で見る一方、アメリカやヨーロッパの国々の篤志家の家庭に養子や里子として預けようと働きかけている。有色人種の子が成人した後の生活を見越して、できればインドの中で養親を探す方がいいと考えてはいたが、実際はヨーロッパへ養子にもらわれていくことが多かった。「貧しい人たちに対する活動はどんな世代の人にも援助の手を差し伸べているが、子どもに対する援助は生活面だけでなく教育面でもシスターが運営する学校を運営し、貧し

い子どもたちの教育に意を配っている」としている。

２）日本の児童養護

(1) 概略

日本の児童養護の歴史を振り返ってみると、古代律令制度の時代までさかのぼることができる。仏教の伝来の影響に伴い 593 年に聖徳太子が悲田院をつくっている。孤児、捨子を収容保護したが、必ずしも児童のみでなく、老人、障害者、病人をも収容した混合施設であった。その後日本の国としての大きな対策はとられてきていないが、1874(明治 7)年に「恤救規則」が施行され、貧困児童の保護については村落共同体における地縁、血縁による相互扶助により行うことを原則と定め、それに漏れた捨子等の貧児が公的救済の対象になり、江戸時代には根絶できなかった堕胎や間引きは厳重に取り締まられるようになった。

1887（明治 20）年には石井十次が岡山孤児院を設立するが、日本における児童の養護についての大きな足跡を残し、現代の児童養護に大きな影響を与えることになった。

(2) 石井十次の孤児救済活動

石井十次（1865~1914）は宮崎県高鍋町で生まれた。岡山県で医学校に入学し、医師を目指していたが、22 歳の時診療所で代診中に２人の子ども連れの女性からその幼い息子を引き取る。これがきっかけにして十次のもとに孤児が集まるようになり、岡山孤児院となってその設立運営に携わることとなる。それより先の 19 歳の時キリスト教の洗礼を受けており、人の為に自分をなげうつという心情が目覚めていった。また、孤児救済にかかわり始めたころ医学の志をあきらめるため医学書を焼き孤児教育に専心する決意を固めている。

横田賢一著(2002)「岡山孤児院物語」によると、石井十次の児童観・教育観については岡山孤児院 12 則に示されているが、子どもの教育についてジャン・ジャック・ルソー著『エミール』に感化されている。「子どもの教育は、心身の自然な発達段階に応じて、子どもの自主性を育て尊重して諸能力を引き出すことにある」や、自然の環境の下で育てるというルソーの考えのように十次は、農業を基礎に孤児たちが自活していけるようにと、雄大な自然が広がる宮崎県西都市茶臼原の原野の開拓に着手し、後に施設を岡山からこの地に移転し、その実現を目指したとしている。

岡山孤児院 12 則

① 家族制度

年齢の異なる少人数で共同生活をする。

② 委託制度

孤児院を運営していく中で、十次は孤児を里子に預ける委託制度すなわち里親制度を始めている。人情や住宅環境のいいところを選んで、近郊の農家に十歳まで預け、それを過ぎればまた孤児院に引き取って職業教育し、社会に送り出すというバーナード・ホーム方式を導入しているが、委託が終われば施設に引き取るという点では、養子縁組とは明確な

区別を敷いていた。

③ 満腹主義

各自食べたいだけ食べることができるようにした。

④ 実行主義

口で説明するより、実際に行動して導く方式をとった。

⑤ 非体罰主義

子どもがよくないことをするのは飢えに因るとか愛情の欠乏のためとし、先に挙げた満腹主義や体罰に寄らない愛情を与えるという方法で導いていく。

⑥ 托鉢主義

孤児院経営の為に零細な募金や寄付金を集めることで、十次はキリスト教の組織を通して募金集めをしている。また、友人である医師仲間にも寄付を呼び掛け、ボランティア的かかわりをも求めている。寄付集めとして特異な活動の一つに、ブラスバンドによる音楽隊の活動がある。この制服姿に身を包んだ孤児たちによる演奏は、日本各地を巡回し岡山孤児院の宣伝と寄付金集めに貢献した。『岡山孤児院物語』によると岡山県を中心に日本各地、台湾、韓国、ハワイ、アメリカ本土にまでわたって活動している。

⑦ 非借金主義

キリスト教関係者からの物心両面の寄付を募ることからスタートし、後援団体を組織するなど、借金に頼らない運営を行っていった。

⑧ 米洗主義

米を洗うとき、何度も洗い流すとぬかがとれ、水が澄んでくる米とぎのように、子どもの気持ちを大切にしながら接し、正しい教育をすることで余計なものが落ち、もともとの特質が発揮されるという考えである。

⑨ 宗教教育

十次自身クリスチャンであり、信仰の精神を重んじた教育を行った。

⑩ 蜜室教育

褒めるのも叱るのも一対一により別室で行う方法をとった。

⑪ 小学教育

院内の小学校で正規の教育を行う。

⑫ 実業教育

各種の職業教育を行うことで、大阪事務所開設では、活版印刷の職業教育を取り入れている。宮崎県の茶臼原では農業生産に力を注ぎ、養蚕のための桑園づくりで「鍬鎌主義」に基づく農業的自活体制が進められ、近くの農家に農業見習いなど実業教育が行われた。

3　現状とその動き

1）児童養護施設の現状

第二次大戦後の状態では、親を失った戦災孤児や駅や公園など街にあふれる浮浪児の発

見と保護が喫急の課題となっていた。1947 年児童福祉法が制定され、養護施設（後の児童養護施設）が設置されて保護を加えるようになったが、大舎制で衣食住の安定を求めた保護を中心とした処遇で運営されてきた。その後幾度かの児童福祉法の改正を経て、児童養護施設の目的や内容の変遷を見ている。すなわち、ノーマライゼーションの影響から建物の大舎制から中、小舎制への動きであり、「小規模児童養護施設」というグループホーム化した活動がある。また各施設に近設している「小規模グループケア」の設置である。さらに施設生活の内容もより豊かに充実したものにしている。

また、施設入所に際しては、児童の意見表明を尊重し親の意見だけでなく児童の意見に配慮した対応がとられるようになった。一人ひとりの児童の権利を認め擁護していく具体的方法の一つに、「権利ノート」を児童に渡すなどして人権尊重に努めている。施設の目的の一つに、自立支援が加わり、入所と同時に児童自立支援計画が立てられ、自立に向けた活動がなされている。

２）保育施設の現状

保育施設については保育需要の増大と多様化に伴い小規模保育、乳児保育、障害児保育、延長保育、夜間保育、ショートステイ、トワイライトステイ、レスパイトステイ等の展開が図られている。この背景になっている問題の一つにベビーホテル問題があった。認可外の保育施設、いわゆるベビーホテルに乳幼児を預けざるを得ない保育ニーズが昭和 50 年代後半から増え始め、保育体制の不備などから子どもの事故死が生じ、それを契機に社会問題になった。保育需要の増加に伴って待機児童の増加を見、これに対する解消も日本の子育て支援(保育体制)の課題の一つになっている。

３）里親制度の変遷

里親制度については児童福祉法制定後明確に位置づけられているにもかかわらず、社会的養護の中で児童養護施設に比較してもその利用が伸び悩んでいる。里親制度の下での里親は、純粋に養育を目的とする里親と、養子縁組を目的とする里親との二種の里親に分かれていて、日本では後者の養子縁組を求める里親が圧倒的に多かった。そのため、実の親は子どもを養子に出すことや、里親に子どもを預け、今度はその子を引き取る段になった時、里親と家庭的つながりが深まった里子が果たして自分のところに戻ってくれるか心配になり、里親に子どもを預けることにためらい施設に預けることを選択してしまう流れになっていた。近年児童福祉法の改正により里親制度の利用を高めるために、養育里親の充実を図る専門里親の制度、さらに親族里親や短期里親の制度を発足させている。

４）その他の動き

赤ちゃんポストについては大きな話題として取り上げられてきている。熊本市の慈恵病院に「こうのとりのゆりかご」（赤ちゃんポスト）を設置、県内外の赤ちゃんを預かってい

る。2007 年 5 月から運用され、2010 年には 18 人の子どもが預けられた。これは児童福祉法に基づく児童の社会的養護について、乳児院なり児童養護施設を利用する手続き上の煩雑さや秘密裏に事を運びたいために、出来た現象であり、制度上の問題点が今後検討されなければならない。

４　児童養護観に対する考察および今後の課題

児童養護観はまず子ども観に対する観念の推移をたどることによって浮き彫りにできる。北村正章(1993)「子ども観の社会史」によると、古来から子どもに対する「子ども観」があったものではなく、近代家族の形成・成立とともにもたらされたものであり、それ以前の子ども観とはまるで違っていた。すなわち、近代以前の古いヨーロッパ社会では、人々に子どもという時期がなく、人間は初めから＜小さな大人＞とされた。それもひとりで自分の用を足すに至らない最も弱い短い時期だけに限られ、自分で何とか用が足せるようになると＜若い大人＞として大人たちと一緒にされ、仕事と遊びも大人たちと共にするようになり、大人のすることを手伝いながら生きていくうえで必要な知識を学んでいった。子どもが生まれても匿名状態の、取り換えのきくものであった。幼くして死んだ場合すぐ代わりの子どもが生まれてくるように思われていて、当時の多産、多死型の社会情勢が影響されていた。

近代子どもの発見はルソーやペスタロッチなどにより子ども観の変革を見てきたが、子どもの発見の一つとしては教育の対象としての子どもであり、未熟な子どもにしつける、作法を教える、あるいは知識を教えるという、育てるという面の教育である。ペスタロッチやフレーベル、モンテッソーリといった教育の分野を上げることができる。もう一つは子どもの存在、人権としての子どもの発見であり、ルソー、エレン・ケイ、コルチャックといった影響が大である。

子どもの人権はごく最近になって認められるようになったが、長らく「大人の所有物」とされ、一人の人間とみなされなかった。その後、保護される子どもとなり、今から六十年ほど前（1948 年）に子ども固有の人権を認めた人権宣言がなされ、1994 年には「児童の権利に関する条約」の日本での発効をみた。子どもに対する見方は、親や大人に支配され、一人前の人として認められない支配的子ども観から発展し、自ら主張し行動する権利の主体を前面に出す、能動的権利を持った子ども観が求められてきている。子どもの最善の利益といった、子ども側からの目線から見た子ども観が表舞台に乗って堂々と議論されるようになってきている。そうした視点をさらに今後も進めていくことになると思う。

施設生活の処遇内容についてみていくと、施設養護のいわゆるサービス内容が人権尊重の下で公平で利用者自身のためのサービスになっているか、苦情解決の対策や第三者による評価を取り入れて対応がとられ始めたばかりである。養護に欠けた子どもとして近年特に注目されている問題に児童虐待があり、児童養護施設入所児童の約半数は被虐待児という現状である。施設以外では専門里親による被虐待児への支援も期待される。

幼児の保育については現状のところで述べたように、乳児保育や延長保育といった多角的な保育形態がとられるようになってきているが、幼稚園と保育園を一体化した幼保一元化の動きが高まり、幼児期の保育と教育を一体化した体制の確立へと進められてきている。そのうえで地域における子育て支援の役割が一層期待されるようになってきている。また、保育所として認定できない規模の家庭的な規模の保育所の在り方や、家庭で子どもを預かるチャイルドマインダーの制度化も進められている。

５　結語

少子高齢化社会を迎えている日本の現状において、子どもの成長や子どもと家庭及び社会との関係に一層関心がもたれてきている。社会が子どもをどうとらえ、どう育てていくかは時代とともに変化してきている。児童を養護する活動や体制は、児童をどうとらえどう見ていくかの児童観の働きがもとになるが、その児童観は先人たちの影響を受け現代に引き継がれてきている。

児童の福祉に対する考え方も保護や扶助の色彩の強い福祉・ウェルフェアから、子どもの最善の利益が守られるウェルビーイングという視点の福祉が求められてきている。これはエレン・ケイやコルチャックの子どもの人権を尊重した流れが実現されてきている。

日本における児童養護に大きな足跡を残したのは石井十次の岡山孤児院であり、西欧のルソーやペスタロッチの影響を受けながら、養護の在り方の基本を築き上げてきた。児童養護の基本は家庭養護であり、それを補ったり代替するものとして社会的養護がある。乳児院、児童養護施設、里親制度等の活用は社会的養護としてウェルビーイングとしての視点で改善がなされてきている。施設の弊害として起きやすいホスピタリズムの問題や、子どもの人権の尊重がうたわれるようになってきた。家庭養護という点からの視点は、家庭の養育力の低下が叫ばれ、子育て支援が現代の当面の課題であり、家庭養護の補強を図らなければならない。

＜引用文献＞

ジョルジュ・ゴルレ、ジャン・バルビエ　支倉寿子訳（1985）「マザー・テレサ愛の旅立ち」日本教分社

北村正章（1993）「子ども観の社会史」新曜社

ペスタロッチ　長田新訳（1993）「シュタンツだより」岩波文庫

竹前健治（2009）「ヤヌシュ・コルチャックと子どもの人権」文化女子大学長野専門学校研究紀要　1，35-39

竹前健治（2010）「ルソーの思想と人間像」文化女子大学長野専門学校研究紀要　2，33-43

横田賢一（2002）「岡山孤児院物語」山陽新聞社

保育科学生による創作ミュージカル

－平成 22 年度　卒業共同研究発表「不思議なたからもの」－

下平　正恵

"Fushigi na Takaramono (Fantastic Treasures)"
An Original Musical Creation and Performance
by Nursery Training Course Students 2010

SHIMODAIRA,　Masae

キーワード　：　オリジナル、手作り、ミュージカル、演劇、創作劇、舞台

１　はじめに

文化学園長野専門学校（２３年度より文化女子大学長野専門学校から校名変更）保育科では、卒業研究として、保育科２年生全員が共同でミュージカルの創作及び、発表を行っている。

本校での卒業共同研究発表会の歴史は、平成２２年度で第２９回目になり、そのうち第１２回目より、それまでの「児童劇」から「創作ミュージカル」の名称になり、内容が大きく変わった。その創作ミュージカルの発表回数は２２年度で１８回目となる。

創作ミュージカルは、毎年ホクト文化ホール（長野県県民文化会館）の中ホールの舞台にて、午前の部は附属高校生、午後の部は一般の観客を前に発表を行っている。

ミュージカルにおける計画、脚本、大道具、小道具、作曲、ダンス、衣装等は、全てが学生の手作りで、共同創作活動は約１年に亘っている。

そこで、平成２２年１２月４日（土）に発表が行われた、平成２２年度保育科卒業生３２名による、卒業共同研究　創作ミュージカル「不思議なたからもの」について報告したい。

２　卒業共同研究のねらい

（１）本校２年間の学習の総まとめとして、脚本・音楽・ダンス・舞台装置などの創作活動を通し、総合的に表現力を高めることはもちろん、創作ミュージカルの発表会を通して企画（計画）力や運営力を身につける。

（２）成功に向けて互いに励まし合い、認め合い、協力し合い、助け合って、保育科・同学年全体の相互の親睦をはかり、困難を乗り越え、努力しあって、やり遂げた満足感や充実感を味わう。

（３）地域や高校生・保護者の方々に、本校保育科のことを理解していただくとともに、より質の高い創作ミュージカルの発表を目指すことにより、地域文化の向上に役立つようにする。

＜ねらいの補足＞

（１）は、本校での学習成果に重点をおき、主に保育者として必要な個人の技術面の力をつけることを目的としたねらいとなっている。

（２）は、保育者として、また社会生活においても必要不可欠な、仲間との協調性やコミュニケーション能力などを培うためのねらいとなっている。

（３）は、地域にねざした本校保育科の存在意義を踏まえるとともに、創作ミュージカル研究の一般公開発表で、ミュージカルの楽しさを伝えることにより、地域の芸術文化への興味関心を高める役割を担うことを目的としたねらいとなっている

３　係名とその役割分担について

はじめに、クラスから３人の総務係が推薦で選出され、総務係の進行により各係決めがスタートする。それぞれ自分の希望する係を第１から第３候補まで選び、それを総務係がまとめて割り当てていく。係分担が決定したら、係長を選出し、係長中心に活動計画を立て、活動開始となる。

なお１番始めの脚本は、クラスの有志が集まり脚本原案を作成し、後に決まった脚本係に引き継ぐ。

指導者は本校専任講師で、総務係や係長中心に報告・連絡・相談を行い、係活動が円滑に進むよう指導する。また、日々の練習計画を把握し、演技指導などを行う。

ここでは、係名とその仕事分担を記す。

＜責　任　者＞　全体、出欠、練習場・健康管理、ブログ管理、その他
＜副　責任者＞　会計（集金・支払・会計報告）、責任者同様
＜演　　出＞　練習企画、演出全般、全体指導
＜合　　宿＞　合宿全般（合宿冊子・予約・連絡・レク）、招待状・礼状関係
＜宣　　伝＞　マスコミ関係、チラシ配布計画、ポスター掲示計画
＜広　　報＞　ポスター・チラシ・パンフレット・アンケート等作成、ブログ管理
＜記　　録＞　録画、写真、記録保存、ビデオ撮影、ＤＶＤ・写真販売
＜脚　　本＞　脚本、台詞、作詞、脚本製本
＜音楽・音響＞　作曲、歌指導、伴奏、音響、効果音、ＭＤ管理・操作、キーボード演奏と操作のマスター・管理
＜演技ダンス＞　振付・指導、演技・指導、ダンス・指導
＜基礎　技術＞　発声練習、身体訓練計画・指導、表現力・指導、ダンスレッスンなどの計画・連絡
＜大　道　具＞　舞台装置、大道具一切（材料調達・制作）
＜小　道　具＞　小道具一切（材料調達・制作）
＜照　　明＞　照明一切
＜衣装メイク＞　衣装一切（材料・型紙調達、制作計画）顔メイク、髪メイク

４　係の組織図

責任者※・副責任者（会計）※・演出※は総務係（推進係）とし、活動計画の立案や進行、指導者との連絡を行う。総務係を中心とし、大まかに運営担当と、技術担当に分かれ、それぞれの分野について研究を重ねていった。

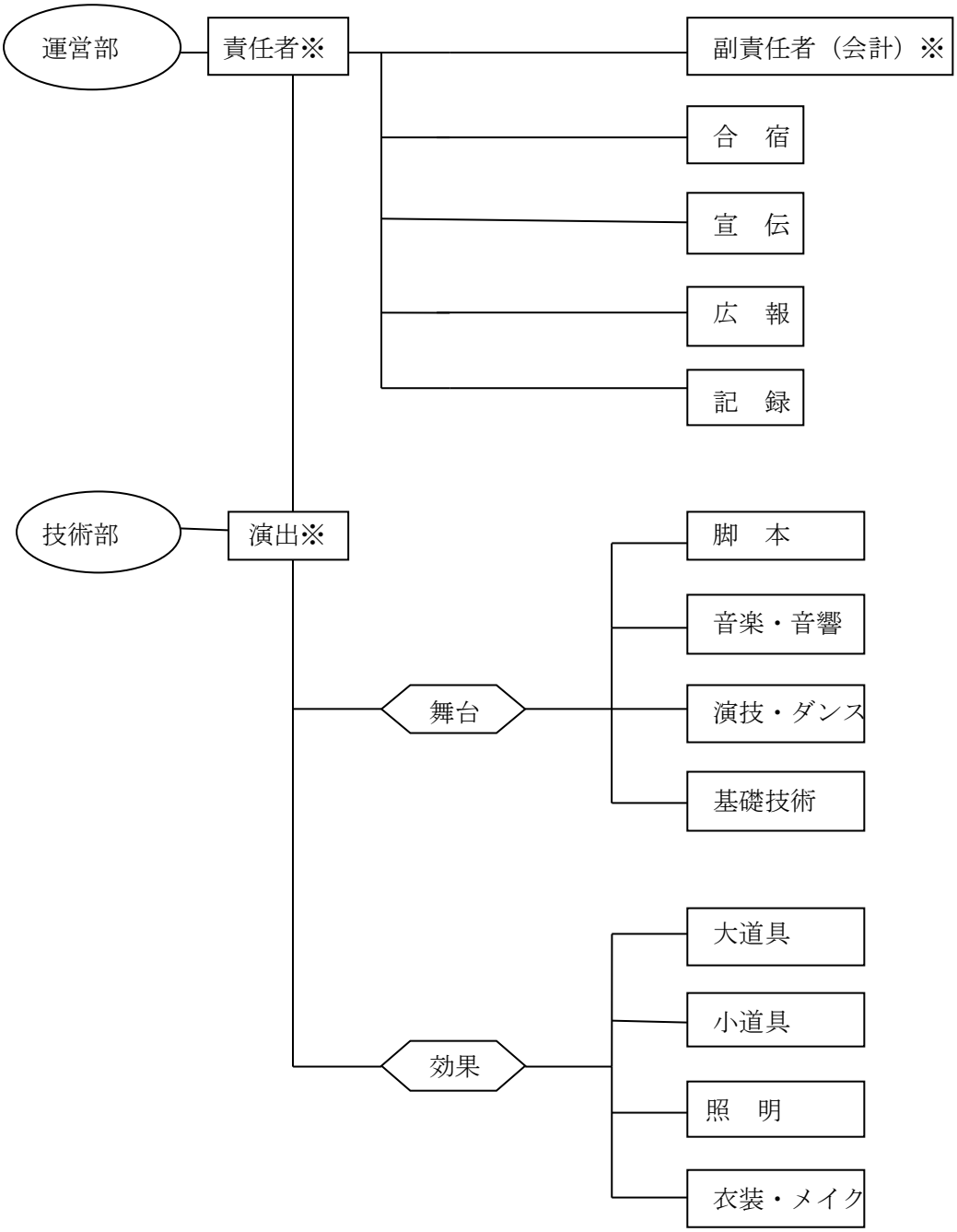

図１

５　各係の活動内容とその時期

ここでは、各係が実際に活動した時期と内容を記す。

①＜総務係　（責任者・副責任者会計）２名＞　　**表１**

年　　月	活動内容
Ｈ２１年　１０月	係決めの進行・決定　　配役決めの進行・決定
〃　　１２月	共同研究予算案作成（副責任者会計）
Ｈ２２年　　１月	係活動３カ月計画作成　　各係活動の進行状況・内容把握
〃　　２月	
〃　　３月	年度末休暇中練習場の確保・管理 稽古用ラインテープ貼り
〃　　４月	練習出欠席把握・指導者への報告、連絡、相談 練習場（各教室）の確保・管理
〃　　５月	中間発表会の進行
〃　　６月	
〃　　７月	通し練習反省まとめ ダンスレッスン計画
〃　　８月	係長会 各係活動３カ月計画表作成 合宿実施・総括
〃　　９月	
〃　　１０月	インフルエンザ予防接種呼びかけ・確認 発表当日手伝い係の分担と依頼（保育科１年生・介護福祉専攻科へ） １１月練習計画表作成
〃　　１１月	校内発表会アンケート集計結果発表・反省 舞台会社との打ち合わせ ホクト文化ホールとの打ち合わせ
〃　　１２月	発表前々日・前日・当日のタイムスケジュール配布 出欠確認・健康状態把握・管理 記録係、音響係、脚本係の活動内容把握・連絡・相談 アンケート集計まとめ 練習場・各教室整理整頓確認
Ｈ２３年　　１月	卒業共同研究報告会の開催・引き継ぎ
〃　　３月	会計報告（副責任者会計）・まとめ

○総務は全体を把握し、円滑に活動が進むよう活動する。指導者への報告・連絡・相談を行う。練習場の管理、人員点呼、健康管理も大切な仕事である。

②＜総務係　（演出）１名＞　　表２

年　　月	活動内容
Ｈ２１年　１２月	発表前日・当日タイムスケジュール作成 卒業共同研究年間計画作成 １～３月までの係活動計画表作成
Ｈ２２年　　１月	脚本係との打ち合わせ　　脚本の読み深め 音響係との打ち合わせ 大道具係との打ち合わせ
〃　　２月	音響確認
〃　　３月	音響・ダンス確認 ミュージカル演技練習計画表作成 演技練習進行
〃　　４月	
〃　　５月	中間発表会の反省・演出修正
〃　　６月	
〃　　７月	夏季休暇中練習計画作成
〃　　８月	合宿練習計画作成
〃　　９月	
〃　１０月	１１月練習計画表作成 照明係との打ち合わせ
〃　１１月	ホクト文化ホールとの打ち合わせ 舞台会社との打ち合わせ 校内発表会反省・演出修正 衣装・メイクとの打ち合わせ
〃　１２月	発表会前最終確認 発表前日、当日のタイムスケジュール配布 リハーサル前練習の進行
Ｈ２３年　　１月	卒業共同研究報告会の開催 まとめ

○総務演出は、ミュージカルの脚本について最も理解を深め、ミュージカルの研究や演技・効果の研究を重ねていく。ミュージカルの練習は常に演出係を中心に進められている。指導者への報告・連絡・相談を行い、練習時は分単位の細かな計画表を作成する。台詞・演技を把握することは勿論、演技全体の指示を的確に行い、全体を指揮していく重要な係である。

③＜合宿係　１名＞　　**表３**

年　　月	活動内容
Ｈ２２年　　４月	合宿レクリエーションのアンケート作成 合宿レクリエーションの計画
〃　　５月	宿泊施設との電話連絡 （宿泊費、体育館・ピアノ借用願、バスの手配について）
〃　　６月	中間発表の招待状作成 合宿への引率職員の把握
〃　　７月	合宿しおり作成・配布・読み合わせ 宿泊施設へ最終確認（レクリエーション内容、部屋割り等） 合宿しおり宿泊施設へ郵送
〃　　８月	２泊３日の合宿 持ち物の把握、健康管理、施設管理指導、開会式・閉会式司会、 施設の方との連絡 合宿終了後の礼状送付 合宿の反省
〃　　９月	招待状送付リスト作成 招待状原案作成
〃　　１０月	招待状印刷・配布準備
〃　　１１月	招待状送付
〃　　１２月	発表会終了後の礼状送付 まとめ

○２泊３日で行われる合宿は、それまで実習等でミュージカル練習に集中できなかった環境から抜け出し、仲間同士の気持ちが一つになれる貴重な練習期間となる。合宿係は、練習が充実させるための計画の他にも、レクリエーションなどの企画にも気を配り、仲間の親睦を深められるよう準備していた。また招待状も担当し、発表１ヵ月前は大変な忙しさになるが、周りの協力を得ながら活動することができた。係活動がない時は人数の足りない係を手伝い、活動していた。

④＜宣伝係　１名＞　　**表４**

年　　月	活動内容
Ｈ２２年　　１月	宣伝計画の立案
〃　　５月	保育科ピアノ発表会取材依頼ＦＡＸ・電話（新聞社） 取材時の応対
〃　　７月	ダンスレッスン取材依頼ＦＡＸ・電話（新聞社） 取材時の応対、新聞記事の配布、新聞社への礼状送付
〃　　９月	宣伝計画の見直し 練習風景取材依頼ＦＡＸ・電話（テレビ局）
〃　　１０月	ポスター掲示、チラシ配布計画
〃　　１１月	ポスター掲示・把握 街頭広告チラシ配布計画・実行 校内発表会取材依頼ＦＡＸ・電話（新聞社・テレビ局） 取材時の応対、記事の配布、新聞社への礼状送付 本番発表時用のアンケート用紙作成
〃　　１２月	本番当日の取材依頼ＦＡＸ・電話 発表後ポスター・広告チラシ回収と確認 記者の方への礼状送付 アンケート集計 まとめ

○早い時期から、いかに宣伝するかを考え積極的にテレビ局、新聞社などに働きかけていた。ダンスレッスンの様子や、校内発表などの取材を依頼し、意気込みや伝えたいことを話し対応していた。大きく新聞などにとりあげてもらうことにより、全体の意識や意欲の向上もみられ、係としては、やりがいを感じることができたようだ。

⑤＜広報係　１名＞　　表５

年　　月	活動内容
Ｈ２２年　　１月	ブログ・パンフレット写真掲載承諾書（学生・職員分）作成 印刷会社の決定・打ち合わせ　　ブログ更新
〃　　３月	劇団四季ミュージカル「はだかの王様」のパンフレットに挟み込む広告の作成 広告挟み込み
〃　　４月	各係長の名刺作り（外部交渉用）
〃　　８月	学校文化祭パンフレットに挟み込む広告印刷
〃　　９月	ポスター原案作成 ポスター最終確認・印刷依頼・ポスター完成
〃　　１０月	ホクト文化ホール（長野県民文化会館）にポスターと広告チラシを届けロビーに掲示してもらう。 チケット完成 専用封筒完成 パンフレット作成スタート ポスター掲示場所の把握・計画 招待状・チケット郵送手配、宣伝活動分担決め
〃　　１１月	招待状・チケット配布の状況確認 街頭広告チラシ配り計画・実行 ポスターパンフレット掲載用個人写真撮影・原稿収集 印刷会社との連絡、訂正箇所・印刷状態確認 パンフレット完成
〃　　１２月	発表後のポスター・広告ちらしの回収と確認 アンケート集計 チケット半券の確認とまとめ

○ポスター・チラシ・パンフレットと外部に出る物なので、何度も案を練り直した。脚本や舞台の変更も発表間際まであるため、パンフレットの制作は１１月の末になっている。日々の練習の様子や係活動の進行状況はブログの中で紹介し、その更新回数は６６回になった。

⑥＜記録係　２名＞　　表６

年　　月	活動内容
Ｈ２２年　　１月	前年度までの記録の確認 ビデオ撮影・写真撮影計画 機材操作マスター
〃　　３月	各係活動日の確認・活動中の撮影
〃　　４月	係活動・演技練習風景撮影
〃　　５月	中間発表会記録撮影
〃　　７月	集合記念写真の隊形の確認と決定 個人・パート毎記念写真隊形の確認と決定
〃　　８月	合宿練習風景撮影 合宿記念写真撮影
〃　　９月	
〃　　１０月	
〃　　１１月	パンフレット用写真撮影 発表当日の撮影を依頼する写真会社、舞台会社、保育科１年生との最終打ち合わせ
〃　　１２月	当日の写真撮影進行指示 記念写真掲示、発注・販売 記念ＤＶＤ制作・メイキングＤＶＤの編集 記録保存 まとめ

○それぞれの係活動の様子や、演技練習の過程を撮影し、本番の発表の様子も合わせてメイキングＤＶＤを制作し、記録を残した。係活動のない時は、大道具係、衣装係の手伝いとして活動していた。

⑦＜脚本係　２名＞　　表７

年　　月	活動内容
Ｈ２１年　１２月	脚本「(仮) 王子と姫」第１版製本・配布
Ｈ２２年　　３月	演出係との打ち合わせ 脚本「(仮) 王子と姫」第２版製本・配布
〃　　４月	演技練習開始　台詞・歌詞・演出部分の変更の把握 場面転換・背景・大道具の把握 演出係との打ち合わせ
〃　　８月	演出係との打ち合わせ 題名変更 脚本「不思議なたからもの」第３版製本・配布
〃　　１１月	演出係との打ち合わせ 脚本「不思議なたからもの」第４版製本・配布 その後本番までの台詞などの大幅な変更部分は、その部分だけ脚本の入れ替えを行う
〃　　１２月	発表当日舞台での台詞を最終脚本として打ち直す。
Ｈ２３年　　２月	題字・挿絵・楽譜など揃え、製本会社に脚本製本の依頼
〃　　４月	脚本配布 まとめ

○脚本の打ち込み・製本が主な仕事になるが、演出係との連携や、台詞が変わったことへの対応ができるよう、配役パート長との連携を大事にしていた。練習期間中は、第１版から第４版までの計４回改定版の製本を行い、発表終了後に最終完成版を発行した。係活動のない時は、衣装係や小道具係の手伝いとして活動をしていた。

作詞一覧　　表８

No.	曲名	No.	曲名
１	王様、お妃様の死	１１	綺麗な心
２	弟の陰謀	１２	平和な国を取り戻そう
３	王子を捕まえろ	１３	悲惨な国
４	一人ぼっち	１４	王になれば
５	姫との結婚Ａ	１５	お姫様がさらわれた
６	王様は大往生	１６	結婚式の準備を急げ
７	いったい何が	１７	姫との結婚Ｂ＋王子の笛③
８	どうしてお父様は・・・	１８	優しい王子様＋素敵なお姫様
９	話せる動物	１９	おめでとう
１０	その命		

⑧＜音楽・音響係　３名＞　　表９

年　　月	活動内容
Ｈ２１年　１２月	ミュージカル音楽の研究
Ｈ２２年　　１月	シンセサイザーで作曲活動開始 できた曲からダンス係におろす
〃　　４月	パート練習用ＭＤ録音　　曲おろし・歌おろし 曲修正
〃　　５月	通し稽古から音響操作
〃　　６月	
〃　　７月	ＢＧＭ曲・効果音作り 二部または三部のハーモニー部分作曲
〃　　８月	全曲手書き楽譜完成
〃　　９月	曲修正
〃　　１０月	
〃　　１１月	旋律部分を消し伴奏のみの音楽に作りかえＭＤ録音 本番用ＭＤ作り
〃　　１２月	まとめ・引き継ぎ
Ｈ２３年　　１月	ＣＤ制作 脚本掲載用楽譜完成　（全３０曲）

○総務の次に早く活動が始まる係である。１月には曲が仕上がっていることが目標だが、なかなかうまくいかない。できた曲からダンス係におろしていく。演技練習が始まり、曲のイメージがミュージカルの内容に合わない時は、曲の作り直しが行われる。また脚本の訂正により、新しい曲やＢＧＭが増えた時にはすぐに対応する。主にキーボードで作曲演奏・録音を行う。旋律の上にパーカッションやベースを加え、音を多彩にしていくことや、前奏・後奏の作曲も重要となる。その他の仕事には、演技練習中のＭＤ操作もある。最後は、このミュージカルで使われた全曲が入ったＣＤ（サウンドトラック）を制作する。

作曲№一覧　　**表１０**

№.	曲名	№.	曲名	№.	曲名
１	開演ＢＧＭ	１１	話せる動物①	２１	王になれば
２	王様、お妃様の死	１２	その命	２２	お姫様がさらわれた
３	弟の陰謀	１３	綺麗な心①	２３	結婚式の準備を急げ
４	王子を捕まえろ	１４	話せる動物②	２４	綺麗な心②
５	一人ぼっち	１５	王子と姫の再会ＢＧＭ	２５	姫との結婚Ｂ＋王子の笛ＢＧＭ③
６	姫との結婚Ａ	１６	王子の笛ＢＧＭ①	２６	優しいお姫様＋素敵な王子様
７	王様は大往生	１７	変わり果てたヘイワナール王国ＢＧＭ	２７	おめでとう
８	いったい何が	１８	平和な国を取り戻そう	２８	移動・終演ＢＧＭ
９	どうしてお父様は・・・	１９	悲惨な国	２９	パート紹介
１０	森の効果音	２０	王子の笛ＢＧＭ②	３０	綺麗な心③

⑨＜演技・ダンス係　３名（１名他の係と重複）＞　　**表１１**

年　　月	活動内容
Ｈ２１年　１２月	ミュージカルダンスの研究
Ｈ２２年　　３月	音響係からおろされた曲からダンス作り
〃　　４月	できたダンスから各パートにダンスおろし
〃　　５月	６つのダンス完成（仮） 未完成ダンス作り ダンス修正
〃　　６月	動物の動き研究
〃　　７月	大道具・小道具・衣装との連携
〃　　８月	バラード曲のダンス研究
〃　　９月	隊形移動、空間をつかったダンス研究
〃　１０月	〃
〃　１１月	ダンス確認・ダンス指導
〃　１２月	本番３日前までダンス・隊形変更・修正 全２１ダンス完成 まとめ

○劇団四季ミュージカルやジャズダンス等を参考にしながら研究を重ね、ダンス（振付）を考えていく。ダンスが決定すると、各パートを集め、それぞれにダンスをおろししていく。音楽を流したり、カウントをとったりしながら、分かりやすく根気よくダンスを伝えていく。単なる手足の動きだけでなく舞台の空間を使ったダンスにするために、幾度となくダンスの修正が行われ、本番直前まで創作が繰り返される。

ダンス振付No.一覧　　表１２

No.	ダンス名	No.	ダンス名	No.	ダンス名
1	王様、お妃様の死	１１	綺麗な心①	２１	綺麗な心③
2	弟の陰謀	１２	話せる動物②		
3	王子を捕まえろ	１３	平和な国を取り戻そう		
4	一人ぼっち	１４	悲惨な国		
5	姫との結婚A	１５	お姫様がさらわれた		
6	王様は大往生	１６	結婚式の準備を急げ		
7	いったい何が	１７	綺麗な心②		
8	どうしてお父様は・・・	１８	優しいお姫様＋素敵な王子様		
9	話せる動物①	１９	おめでとう		
１０	その命	２０	パート紹介		

⑩＜基礎技術係　２名＞　　表１３

年　　月	活動内容
Ｈ２１年　１２月	朝練習開始 動ける体・踊れる体・歌える体づくりの研究
Ｈ２２年　　１月	腹式呼吸、発声、足あげ、腹筋、背筋、ストレッチの考案・進行
〃　　５月	バレエターン練習
〃　　６月	ダンスレッスン準備
〃　　７月	ダンスレッスン・進行 夏季休暇中体力強化カード作り
〃　　８月	夏季休暇練習計画・実施
〃　　９月	立ち方・口の開け方指導
〃　　１０月	体力テスト計画・実施 練習内容強化
〃　　１１月	歌唱力強化練習実施
〃　　１２月	発表前日リハーサル前ウォームアップ進行 発表当日本番前ウォームアップ進行 まとめ

○ダンス講師や音楽講師と連絡・相談を行い、約１年かけて全員が踊って歌って動ける身体になるよう計画を練り、実践していた。学校だけの努力では足りないため、休みの日も家で身体を鍛えられるよう、練習メニューカードを作成した。また、実際身体づくりができているか実際にテストを行い、一人ひとりに意識づけた。係活動がない時は、大道具係の手伝いとして活動していた。

⑪＜大道具係　６名＞　　表１４

年　　月	活動内容
Ｈ２１年　１２月	背景パネル原案考案
Ｈ２２年　　１月	材料収集（角材・ベニア・段ボール等） 舞台会社との打ち合わせ 背景パネル原案修正
〃　　２月	背景パネル設計図作成 舞台平面図作成
〃　　３月	場面「森」パネル制作開始
〃　　４月	場面「森」パネル木材付け
〃　　５月	舞台会社との打ち合わせ 場面「森」パネル解体・再制作
〃　　６月	場面「森」パネル骨組み制作・アゲ制作
〃　　７月	場面「森」パネル障子貼り 場面「ヘイワナール王国」布パネル制作開始
〃　　８月	場面「森」パネル色塗り 場面「ヘイワナール王国」布パネル仮縫い・本縫い 他場面ミニチュア模型制作・原案修正
〃　　９月	場面「森」パネル完成 場面「ヘイワナール王国」布パネル下描き・色塗り 場面「ブリョーク王国」ベッド・アーチ制作開始
〃　　１０月	大道具週間実施 場面「ヘイワナール王国」布パネル完成 場面「ブリョーク王国」ベッド天蓋、背もたれ・アーチ・柱完成 布パネル吊るし用紐付け
〃　　１１月	場面「森」パネル用人形準備 場面「ブリョーク王国」レッドカーペット制作・完成
〃　　１２月	発表前々日　荷作り・トラックへ積み込み作業 発表前日　ホクト文化ホールにて　ベッド・アーチ組み立て 舞台装置の位置決め、最終チェック 発表後　解体作業

○原案作成の段階で計画より大幅な遅れがあり、更にイメージの違いで「森」パネルを途中解体するというアクシデントも重なったため、本番２か月前に４場面のうち１場面しか完成していないという事態になった。大道具の人数も少ないことから、クラス全員で集中して作業を行えるよう大道具週間を設け、一気に完成へと近づけた。

大道具一覧　　**表１５**

場面	パネル等
第１場面　ヘイワナール王国宮殿内	布背景（高 8m×幅 18m）
第２場面　ブリョーク王国宮殿内	天井幕（4m×4m）を４枚 天蓋付きベッド （縦 2.5m×横 1.6m高 0.65m　天蓋高さ 2.5m）
第３場面　森	森パネル 花畑　池
第４場面　ヘイワナール王国宮殿内	布背景（第１場面と同じもを使用）
第５場面　ブリョーク王国宮殿内	布背景　柱（高 8m×幅 2.4　m）を２枚 天井幕（4m×4m）を４枚 結婚式アーチ（高 3m　幅 2.2m） レッドカーペット 階段

⑫＜小道具係　５名＞　　表１６

年　　月	活動内容
Ｈ２１年　１２月	小道具材料研究 国・時代・季節研究
Ｈ２２年　　１月	イメージ原案作成・修正
〃　　２月	「剣」の試作
〃　　３月	1600 年代フランス家具研究
〃　　４月	「剣」の制作
〃　　５月	ワインの瓶・グラス研究
〃　　６月	王子の笛の試作・制作
〃　　７月	親書の研究
〃　　８月	「剣」のさや制作
〃　　９月	「池」「花」「動物の遊び道具」の制作 「テーブル」「椅子」の装飾
〃　　１０月	「花台」の制作
〃　　１１月	「フルーツかご」「フルーツ」「王冠」「クマの杖」「切り株」 「ろうそく」「親書」の制作
〃　　１２月	発表前日　最終チェック・修正・補強 発表後　解体作業 まとめ

○1600 年代フランス近辺が舞台となっているため、その時代の道具について調べることから始まった。小道具はイメージだけでなく、実際の物により近づけられるよう意識した。また、小道具制作は材料研究も重要で、特に「剣」や「王子の笛」は、軽くて丈夫な物にするため試行錯誤を繰り返した。

小道具一覧　　**表１７**

1	王子の笛	１１	果物	２１	引き出し付き花台
2	王子笛袋	１２	燭台	２２	クマの杖
3	花瓶の花①	１３	王テーブル	２３	H国剣（7）
4	花瓶の花②	１４	王椅子（2）	２４	王子剣
5	王子胸の花	１５	姫椅子	２５	叔父剣
6	ワイン瓶	１６	動物遊び道具　縄	２６	B国剣（6）
7	ワイングラス	１７	〃　木の実	２７	親書
8	テーブルクロス	１８	森の花		
9	テーブルカーペット	１９	森の池		
１０	果物器	２０	切り株		

⑬＜照明係　２名＞　　表１８

年　　月	活動内容
Ｈ２２年　　４月	ミュージカルの研究 ミュージカル照明の研究 脚本の把握
〃　　５月	演劇講習会照明編参加
〃　　６月	
〃　　７月	
〃　　８月	演出係と舞台イメージの話し合い
〃　　９月	
〃　　１０月	
〃　　１１月	照明イメージ画作成・修正 舞台会社（照明）との打ち合わせ
〃　　１２月	発表前日リハーサル照明確認・打ち合わせ・修正・最終調整 まとめ

○照明は、イラストなどを使い原案を考えても、本番前日発表会場でのリハーサルでしか実際に照明を確認することはできない。そのためそれまでの係活動は、ひたすらミュージカル照明の研究とイメージ原案の作成になる。リハーサルを通して照明を確認し、舞台会社の照明担当と調整を繰り返す。照明係は後半からの出番となるため、衣装係の手伝いも兼ねていた。

⑭＜衣装・メイク係　２名＞　　表１９

年　　月	活動内容
Ｈ２２年　　３月	設定時代の衣服研究 布・かつら・メイク等の研究 型紙研究 衣装、ヘアーの原案作成・修正
〃　　４月	衣装原案完成
〃　　５月	採寸・型紙作り 布等の買い出し・裁断 試作品作り
〃　　６月	見本完成 縫製作業の分担決め・布配布・縫い方説明
〃　　７月	全役靴作り・布配布・縫い方説明
〃　　８月	衣装縫製
〃　　９月	〃　　ヘアー原案練り直し
〃　　１０月	衣装完成・微調整
〃　　１１月	校内発表前　試しメイク 校内発表後　家来帽子作り直し、動物手袋追加制作、 ジャック・ピエール・姫・ブリョーク王・ヘアー修正、 動物メイク修正
〃　　１２月	メイク道具の確認・裁縫道具の確認 ヘアー・メイクの確認 衣装・かつら・帽子・冠・動物耳の最終チェック まとめ

○衣装係が２名と少ないこともあり、衣装原案、型紙、布裁断、試作品作りが終わると、衣装の手伝い係や、各パートに縫製依頼をして製作を進めていった。動物の衣装では、尻尾や耳なども工夫し、手袋には動物特有の肉球もつけ動物らしさを追求した。練習の段階から衣装をなるべく着用し、本番に破れやほつれが出ないよう改善を重ねる。

衣装一覧　　**〇内は種類数　（　）内は枚数**　　**表２０**

１	王子シャツ	１１	従兄弟シャツ②	２１	H家来ズボン（７）
２	王子ズボン	１２	従兄弟ズボン	２２	H家来ベスト（７）
３	王子ベスト	１３	従兄弟ベスト②	２３	H家来帽子（７）
４	王子ジャケット	１４	叔父シャツ	２４	B家来シャツ（８）
５	姫ドレス①	１５	叔父ズボン	２５	B家来ズボン（６）
６	姫ドレス②	１６	叔父ベスト	２６	B家来ベスト（６）
７	姫手袋	１７	叔父ジャケット	２７	B家来帽子（６）
８	従兄弟シャツ①	１８	H王ねまき	２８	B家来スカート（２）
９	従兄弟半ズボン	１９	H妃ねまき	２９	B家来エプロン（２）
１０	従兄弟蝶ネクタイ	２０	H家来シャツ（７）	３０	B家来髪飾り（２）

３１	クマ王上着	４１	サル手袋	５１	キツネシャツ（２）
３２	クマ王ズボン	４２	ウサギワンピース（２）	５２	キツネスカート（２）
３３	クマ王マント	４３	ウサギ耳（２）	５３	キツネしっぽ（２）
３４	クマ王耳（２）	４４	ウサギ手袋（２）	５４	キツネ耳（２）
３５	クマ手袋（２）	４５	ウサギ帯（２）	５５	リスベスト（２）
３６	クマ妃ベスト	４６	ヒツジベスト（２）	５６	リス半ズボン（２）
３７	クマ妃スカート	４７	ヒツジ半ズボン（２）	５７	リスしっぽ（２）
３８	サルベスト	４８	ヒツジ蝶ネクタイ（２）	５８	リス耳（２）
３９	サルズボン	４９	ヒツジ耳（２）	５９	リス手袋（２）
４０	サル耳	５０	ヒツジ手袋（２）	６０	タヌキ半ズボン（２）

６１	タヌキしっぽ（２）
６２	タヌキ耳（２）
６３	タヌキ手袋（２）
６４	B王ねまき
６５	B王ひげ
６６	H王ひげ

６　ミュージカル配役・パートについて

本校の卒業共同研究では、全員が担当の係を持ち、全員が舞台に上がるよう計画されている。つまり、全員が裏方と役者を経験するということである。係分担と役割については前記したが、ここでは配役（表２１）とパート（表２２）について記す。

配役決めは、係決めとほぼ同じ時期に行う。脚本が発表されてから、クラス全員の投票と総務係による微調整で全役同時に決定する。その後、役ごとパートが決められ、パート長が選出される。演出係を中心にパート長が連絡を取り合い、パート練習が進められていく。

「不思議なたからもの」役名一覧　　**表２１**

No.	役　名	No.	役　名
１	H国・王子アンドレ	１１	H国家来Z
２	H国・王**※１**	１２	B国・王**※３**
３	H国・妃**※２**	１３	B国・姫アイリス
４	H国・王の弟ジャック	１４	B国・従兄弟ピエール
５	H国家来１	１５	B国家来１
６	H国家来２	１６	B国家来２
７	H国家来３	１７	B国家来３
８	H国家来４	１８	B国家来４
９	H国家来５	１９	B国家来５
１０	H国家来Y	２０	B国家来６

No.	役　名	No.	役　名
２１	B国メイド１	３１	キツネ２（♀）
２２	B国メイド２	３２	タヌキ１（♂）
２３	クマ１（♂）**※１**	３３	タヌキ２（♂）
２４	クマ２（♀）**※３**	３４	ヒツジ１（♀）
２５	サル（♂）	３５	ヒツジ２（♀）
２６	ウサギ１（♀）**※２**		
２７	ウサギ２（♀）		
２８	リス１（♂）		
２９	リス２（♂）		
３０	キツネ１（♀）		

H国・王※１とクマ（♂）※１
H国・妃※２とウサギ（♀）※２
B国・王※３とクマ（♀）※３
} は、二役かけもちの役とする

「不思議なたからもの」役名とパート　　表２２

パート名	役名
王子と姫	アンドレ王子・アイリス姫　※亡くなる王・妃
ヘイワナール王国	ジャック・家来７名
ブリョーク王国	ピエール・家来　男６名　メイド２名・※亡くなる王
森の動物	クマ王・クマ妃・サル・ウサギ２名・リス２名 キツネ２名・タヌキ２名・ヒツジ２名

７　創作ミュージカル「不思議なたからもの」場面とあらすじ

ここでは、創作ミュージカル「不思議なたからもの」のあらすじを、場面をおって紹介する。

第１場面＜ヘイワナール王国＞

舞台は 1600 年代、フランス近辺にある裕福で平和な国ヘイワナール王国宮殿内。いつものように王と妃が就寝前にワインで乾杯すると、突然二人は倒れ、亡くなってしまう。そこへ王の弟、つまりアンドレの叔父であるジャックが現れ、ワインに毒が入っている、毒を盛ったのは王の一人息子であるアンドレ王子だと家来たちを洗脳する。アンドレ王子はジャックと家来たちから追われ、亡き父から譲り受けたこの国の宝である「笛」を持って城の外へ逃げ出す。

第２場面＜ブリョーク王国＞

同じ頃、武力の優れた国、ブリョーク王国では、長年病に臥せっていた王が臨終の時を迎える。一人娘のアイリス姫が悲しむ中、アイリス姫の従兄弟であるピエールが、王の遺言はアイリス姫と自分が結婚することだった、と嘘をつく。アイリス姫は、変わり者のピエールと結婚することを拒み、城から逃れる。

第３場面＜森＞

城を出たアイリス姫が辿りついたのは森。そこで出会った動物たちは、綺麗な心の人間とだけ話ができる動物たちだった。そしてその森にある池は、人間の世界が映し出される不思議な池で、動物たちは二つの国で起きたことをすべてこの池を見て知っていた。動物たちがアイリス姫を森で休ませていた頃、アンドレ王子もこの森に迷いこんできた。そこでアイリス姫とアンドレ王子が出会う。この二人は以前行われた国同士の晩餐会ですでに顔見知りだったのだ。お互いの事情を知り、励まし合う。王子がアイリス姫を慰めるために「笛」を吹くと、アイリス姫はすっかり元気を取り戻し、動物たちは不思議な笛の音色の持つ力に感動する。

アンドレ王子が人間界を覗くことのできる池を見ると、ヘイワナール王国ではアンドレの叔父であるジャックが新しい王になり、城の者を苦しめていることを知る。アンドレ王子は、無実なのに逃げてきたこと、自分の国を守れなかったことを後悔し、国に戻ることを決意する。

第４場面＜ヘイワナール王国＞

我がまま放題の生活を送っていたジャックの前にアンドレ王子が現れ、自分は王のワインに毒を入れた犯人ではないと訴える。この時連れていった動物とジャックが話ができないことから、ジャックの心が醜いことが判明。そしてアンドレ王子が国の宝である「笛」を吹くと、ジャックが改心をし、ワインで王と妃を毒殺したのは自分だと白状する。

しかしこの時、森に残してきたアイリス姫がピエールに捕われたという知らせが動物から入る。アイリス姫を救うためアンドレ王子は動物たちとブリョーク王国へ。

第５場面＜ブリョーク王国宮殿内＞

その頃ブリョーク王国ではピエールとアイリス姫の結婚式の準備が進められていた。ウェディングドレスのアイリス姫が、泣く泣く支度を整えた頃アンドレ王子が到着する。ピエールは強引に結婚式を進めようとするが、王子の吹く笛の音色を聞き改心を始め、やがて、自分とアイリス姫が結婚しなければいけないという王の遺言は嘘だったと告白する。そして、ブリョーク王の本当の遺言がアイリス姫とアンドレ王子の結婚をすすめるものだったことが王の遺した親書から分かり、二人の結婚が決まる。皆に祝福されてアンドレとアイリスの結婚式のフィナーレ。

８　ミュージカル練習の経過

係活動の内容の中で記したように、ミュージカル練習はまず脚本、演出、音響、ダンスがそろって初めて開始される。２年生４月から演技練習に入ることができるよう準備を進めていった。全てが素人である学生の手作りなので、常に変更や修正が繰り返される。昨日の台詞が、曲が、ダンスが今日変わる・・・という日々を繰り返し、より良い作品へと変化していく。

表２３の※１～※４にあるように、大きく４回の発表をしている。

※１の中間発表会は、本校保育科の職員を中心に招待し、それまでの練習の成果を発表した。※２の校内発表会は、本校職員、保育科１年生、介護福祉専攻科の学生、報道関係者を招待してほぼ完成に近い内容で発表した。※３のホクト文化ホール（長野県民文化会館）中ホールでの発表会は午前の部、午後の部と２回行った。とくに、中間発表会と校内発表会を設けることで、学生がその都度目標を持って練習や係活動に取り組み、成果が得られたように感じる。

実際に行われた主な練習内容　　**表２３**

月	内　容
３月	歌おろしとダンスおろし
４月	脚本読み合わせ　　本校専任講師による演技指導 第１場面～　　本校専任音楽講師による音楽指導 主にパート練習　（演技・歌・ダンス）
５月	第１場面～第３場面 パート練習（演技・歌・ダンス）・場面練習・通し稽古 ○中間発表会※1（本校ホールにて）第１場面～第３場面まで
６月	幼稚園教育実習のため中旬からの活動 第４場面～第５場面 パート練習（演技・歌・ダンス）・場面練習
７月	第４場面～第５場面 パート練習（演技・歌・ダンス）・場面練習・通し稽古 ○プロダンサーによるダンスレッスン（１日間）
８月	第１場面～第５場面 通し稽古 ○卒業共同研究合宿（３日間） （第１場面～第５場面　パート練習・通し稽古・リハーサル）
９月	第１場面～第５場面 パート練習（演技・歌・ダンス）・場面練習・通し稽古 部分練習　（ダンス練り直し）
１０月	第１場面～第５場面 通し稽古・リハーサル・歌集中レッスン 脚本大幅修正による演技練習
１１月	第１場面～第５場面 場面練習・通し稽古・リハーサル・歌集中レッスン ○演劇講師を招いての稽古（１０日間） ○卒業共同研究　校内発表会（附属高校体育館にて）※2
１２月	最終調整 ○本番会場での場当たり練習・リハーサル ○卒業共同研究発表会　ホクト文化ホール（長野県民文化会館）中ホールにて 午前の部※３・午後の部※４（２回公演）

９　創作ミュージカル公演後のアンケート実施と結果

当日午前の部は、主に附属の高校生を対象とし 382 人、午後の部は、一般の方を対象とし 1114 人の方に来場いただき、パンフレットを配布できなかった幼児の数を含めると、合わせて 1500 人以上の方にこの発表を観ていただいたことになる。

パンフレットにアンケート用紙を挟み、感想等を記入していただき、公演終了後に会場出口にて回収した。

ここでは、実際のアンケート用紙（午前の部用　資料１、午後の部用　資料２：宣伝係作成）と、その結果について記す。

① 午前の部（附属高校生対象）アンケート結果　（資料１参照）

アンケート回答者数：276 人

1　本日の創作ミュージカル「不思議なたからもの」をご覧になった感想はいかがですか

①大変楽しかった 167　②楽しかった 96　③まあまあ 15　④楽しくなかった 0
⑤その他 9

2　本日の創作ミュージカル「不思議なたからもの」の中でよかったと思うところはどこですか（複数回答あり）

①演出 114　②脚本 109　③作曲 95　④歌唱 142　⑤ダンス 132
⑥演技 139　⑦音響 78　⑧照明 77　⑨衣装 132　⑩メイク 78
⑪舞台装置 71　⑫小道具 69　⑬その他 19

多数の意見を抜粋

〇演出に関する意見
・感動で涙が出ました
・気持ちが伝わりました　おもしろくて最後までしっかりと見た
・ひとつひとつの演出がすごく良かったと思います

〇脚本に関する意見
・日々の生活の中で忘れがちなものをよく取り上げていると思います
・笑いもあって良かった
・ストーリーがわかりやすくて良かった

〇作曲に関する意見
・歌が心に残る感じで良かった
・音楽と話にのめりこめた
・素敵な歌がいくつかあった

〇歌唱に関する意見
・歌がとても上手でした
・声もすごく出ていて、一人で歌っているのにとても大きな声ですごいなと思いました
・最後の歌が素晴らしかった

〇ダンスに関する意見
・生き生きと踊れていてすっきりした
・ダンスの表現力があって、見ていてとても楽しかったです
・家来たちのダンスがキレがあって良かった

〇演技に関する意見

・役になりきれていてすごかった
・ピエールの演技が良かった
・演技が光っていた
〇音響に関する意見
・音響が素晴らしい
〇照明に関する意見
・全ての演技に合わせて照明が変わっていたのですごいと思った
〇衣装に関する意見
・衣装・舞台装置が洗練されており、色のバランスが心地よかった
・お姫様のドレスが良かった
・家来の帽子が気に入りました
〇メイクに関する意見
・メイクがすごかった
・ヒツジのメイクが良かった
・衣装やメイクも手を抜かず、細かいところまで、きちんとしていたのですごいと思いました
〇舞台装置に関する意見
・舞台装置がすごく大がかりで良かった
・ヘイワナールの宮殿の背景に感動しました
・大道具の素早い移動がすごかった
〇小道具に関する意見
・小道具がとても手が込んでいて良かった
〇その他の意見
・堂々としていて良かったです
・誰が見ても楽しく見られると思った
・一人ひとりの表情がとても良かった
・もう一回見たいです

3　改善したほうがよいと思うところはどこですか

①演出 3　②脚本 11　③作曲 6　④歌唱 13　⑤ダンス 10　⑥演技 13
⑦音響 9　⑧照明 5　⑨衣装 4　⑩メイク 19　⑪舞台装置 3　⑫小道具 2
⑬その他 0

多数の意見を抜粋

・一人の歌の時もう少し声が出るとよいと思いました
・台詞をもっと大きく　声が小さかった

4　印象に残っている点、その他感想などございましたらご記入ください

多数の意見を抜粋

・ピエールの演技とダンスがとてもよかった
・王子と姫が出会うところが良かった
・結婚式が良かった
・王子のソロと歌唱力
・最後のシーンに感動しました
・王子を捕まえるシーン
・笛の力が印象に残った
・一人ひとりの表情から動きまで心が入っていた　　など

②午後の部（一般客対象）アンケート結果　（資料２参照）

アンケート回答者数：318

1　本日の創作ミュージカル「不思議なたからもの」をご覧になった感想はいかがでしたか

①大変楽しかった 247　②楽しかった 64　③まあまあ楽しかった 7
④楽しくなかった 0　⑤その他 0

2　本日の創作ミュージカル「不思議なたからもの」を何でお知りになりましたか

①幼稚園・保育園・学校 50　②学生・職員から 146　③知人・友人から 99
④マスコミ（長野市民新聞・信濃毎日新聞・週刊長野）34
⑤ちらし・ポスターで 48　⑥昨年またはそれ以前の創作ミュージカルを見て 28
⑦その他 8

3　本日の創作ミュージカル「不思議なたからもの」の中でよかったと思うところはどこですか

①演出 188　②脚本 176　③作曲 176　④歌唱 216　⑤ダンス 186
⑥演技 205　⑦音響 137　⑧照明 149　⑨衣装 207　⑩メイク 129
⑪舞台装置 144　⑫小道具 128　⑬その他 8

多数の意見を抜粋

〇演出に関する意見
・感動的な内容で、見た後に心があたたかくなった
・きれいな心を大切にしていきたいというメッセージが伝わった
・会場との一体感があってとても良かった

〇脚本に関する意見
・喜怒哀楽があり、楽しかった
・話が分かりやすく、ストレートに思いが伝わってきました
・ストーリーに無理がなくスムーズに理解できた

〇作曲
・いい曲がたくさんあった
・曲が全部自分たちで作られているのはすごいと思った
・ハモリがあってよかった

〇歌唱に関する意見
・声の出し方など感情が入っていた
・声がどの学生もとても綺麗でよくとおった

・ソロの歌声がとても綺麗でした　全員の歌も揃っていて良かったです
○ダンスに関する意見
・ダンスがみんなそろっていて綺麗だった
・ピエールのダンスが良かった
・ダンスと曲が合っていて、観ていて楽しかったです
○演技に関する意見
・ピエールの演技が素晴らしかった
・自信たっぷりに演じているのが良かった
・楽しそうに演技していたので見ているこっちも楽しかった
○照明に関する意見
・ストーリーにあった照明だった
・照明がとても良かった
○衣装に関する意見
・衣装が凝っていて良かった
・ピエール・動物の衣装が良かった
○メイクに関する意見
・髪型とメイクが役にはまっていて良かった
・メイクが細かくて良かった
○舞台装置に関する意見
・木がよかった　空間を大きく利用できていた
・背景画・舞台装置が特に良い
・ベッドが本物みたいで良かったです
○小道具に関する意見
・道具が細かくて感動しました
・森の道具がとてもすごかったです
○その他
・みんなが一つになって、一つのものを創り上げるということの素晴らしさを感じた
・全てオリジナルなのが良い
・みんなが頑張っている姿が一番良かった
・吸い込まれるように観てしまいました
・少人数でここまで創るのはすごいです
・色合いがとてもよかった　芸術的だった
・感動して涙が出た
・全体的に素晴らしく、感激した
・子どもが集中して観ていた　など

4　改善したほうが良いと思うところはどこですか

①演出７　②脚本９　③作曲２　④歌唱８　⑤ダンス６　⑥演技２
⑦音響６　⑧照明０　⑨衣装１　⑩メイク５　⑪舞台装置４
⑫小道具１　⑬その他

○多数の意見を抜粋

・声が小さくて聞こえづらい所があった
・もう少しテンポが欲しい
・ダンスをもう少し工夫すれば良かった
・子どもには難しい言葉や場面があった

5　印象に残っている点、その他の感想などございましたらご記入ください

○多数の意見を抜粋

・綺麗な心をテーマにしたストーリーが良かった
・歌唱力がとても良かった
・フィナーレが良かった
・各配役が心に残った
・明日からまた頑張ろうと思えた
・涙が止まりませんでした
・会場案内の親切さ
・素晴らしい先生になれると思います　感動をありがとう
・来年もまた観たい
・とても素人とは思えない出来栄えに感動
・ひとつになったみんなの気持ちが素晴らしい
・一生懸命さが伝わってきました　など

１０　考察

保育者を志す学生が、創作ミュージカルを研究し発表をすることは、正直容易なことではない。この卒業共同研究創作ミュージカルを楽しみに入学する学生もいるが、苦手意識を持っている学生、保育者との関連性に疑問を持つ学生も少なくないからだ。

演技をすることに抵抗のある学生、ダンスや歌が苦手な学生、コミュニケーションの苦手な学生、様々な学生たちがこの卒業共同研究創作ミュージカルを通して学ぶことは何か。

はじめは人前で表現することに恥ずかしさを感じていた学生も、練習を積んでいくうちに自信をつけていくことができた。人前で演技をしたり、歌をうたったり、ダンスを踊ったりする楽しさや喜びを味わい、全員が保育者にとって必要不可欠な表現力を習得できたように思う。

また、この共同研究では、表現や技術などの目に見えるものだけではなく、計画力、企画力、運営力、協調性、自律心、責任感、コミュニケーション能力を身につけることを含め、共同研究だからこそ生まれる内面的・心理的な問題を受けとめ、解決する力を養うことも学ぶことができる。他者を認め、自分の良さを見出し、互いに切磋琢磨しあって成長していく姿を見ることができた。

共同研究の日々の中では、必死になって考え、眠れないほど悩み、時にはもう共同研究をやめたい、辛いことしかない、と訴える学生もいた。しかし一緒に頑張ろうと励ます仲間の存在が必ずあった。そして、互いに支え合ってこのミュージカル発表を成功させた時、学生たちは「ミュージカルって楽しい」「やってきて良かった」「これで終わるなんて寂しい」という言葉を発し、同時に、仲間に対して「ありがとう」という感謝の気持ちを伝えあうことができた。

さらに、自分たちがやり遂げた感動の大きさもさることながら、本番沢山のお客様にご来場いただいたことや、お客様に沢山の感想をいただき、感動していただけたことも学生たちにとって大きな喜びとなった。また、この大きな会場・舞台を使って発表することで、自身の存在意義や可能性をより強く実感できたのではないだろうか。

創作ミュージカルの共同研究の意義や重要性について、準備段階にはなかなか理解できなくても、発表が終わった瞬間に初めてそれに気づく学生も多いだろう。もしかしたら、保育者となって現場に出た時に、この共同研究の本当の意味を理解する学生もいるのかもしれない。

この貴重な１年間で経験した失敗、満足感、感動、身に着いた技術は、全てが保育・幼児教育・福祉の現場において役に立つものであって欲しい。これからの社会を担う子どもたちを育てるという、責任のある仕事に誇りを持ち、一人の人間として更に努力と成長を重ねようとする意欲と、自信を持てる学生であって欲しいと思う。

今後の卒業共同研究創作ミュージカルも、本校保育科での２年間の学習成果を最大限に発揮できる場となり、さらに保育者として必要な資質を身につけることができる有意義な活動になることを願っている。

資料１

創作ミュージカル「不思議なたからもの」アンケート　午前の部

本日は、創作ミュージカル「不思議なたからもの」にご来場いただき、誠にありがとうございました。
文化女子大学長野専門学校の保育科では、皆様からのご意見をお伺いし、来年度以降もより良い共同研究を目指して励んでまいりたいと思っております。

つきましては、下記のアンケートにご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

１　本日の創作ミュージカル「不思議なたからもの」をご覧になった感想はいかがですか。

①　大変楽しかった　　②楽しかった　　③まあまあ楽しかった　　④楽しくなかった

⑤その他(　　)

２　本日の創作ミュージカル「不思議なたからもの」の中でよかったと思うところはどこですか。【複数回答可】

①演出　②脚本　③作曲　④歌唱　⑤ダンス　⑥演技　⑦音響　⑧照明　⑨衣装

⑩メイク　⑪舞台装置　⑫小道具　⑬その他(　　)

★よろしければ、具体的な内容をご記入ください。

３　また、改善したほうが良いと思うところはどこですか。【複数回答可】

①演出　②脚本　③作曲　④歌唱　⑤ダンス　⑥演技　⑦音響　⑧照明　⑨衣装

⑩メイク　⑪舞台装置　⑫小道具　⑬その他(　　)

★よろしければ、具体的な内容をご記入ください。

４　　印象に残っている点、その他の感想などございましたらご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

当アンケートは、ロビーにございます回収箱にお入れくださいますよう、お願い申し上げます。

文化女子大学長野専門学校　保育科　卒業共同研究係

資料 2

創作ミュージカル「不思議なたからもの」アンケート 午後の部

本日は、創作ミュージカル「不思議なたからもの」にご来場いただき、誠にありがとうございました。

文化女子大学長野専門学校の保育科では、皆様からのご意見をお伺いし、来年度以降もより良い卒業共同研究発表を目指して励んでまいりたいと思っております。

つきましては、下記のアンケートにご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

1　本日の創作ミュージカル「不思議なたからもの」をご覧になった感想はいかがですか。

① 大変楽しかった　②楽しかった　③まあまあ楽しかった　④楽しくなかった

⑤その他(　　)

2　本日の創作ミュージカル「不思議なたからもの」を何でお知りになりましたか。【複数回答可】

①幼稚園・保育園・学校で　②学生・職員から　③知人・友人から

④マスコミで(長野市民新聞・信濃毎日新聞・週刊長野)

⑤ちらし、ポスターで

⑥昨年、またはそれ以前の創作ミュージカルを見て　⑦その他(　　)

3　本日の創作ミュージカル「不思議なたからもの」の中でよかったと思うところはどこですか。【複数回答可】

①演出　②脚本　③作曲　④歌唱　⑤ダンス　⑥演技　⑦音響　⑧照明　⑨衣装

⑩メイク　⑪舞台装置　⑫小道具　⑬その他(　　)

★よろしければ、具体的な内容をご記入ください。

4　また、改善したほうが良いと思うところはどこですか。【複数回答可】

①演出　②脚本　③作曲　④歌唱　⑤ダンス　⑥演技　⑦音響　⑧照明　⑨衣装

⑩メイク　⑪舞台装置　⑫小道具　⑬その他(　　)

★よろしければ、具体的な内容をご記入ください。

5　さしつかえなければ、性別、年齢、所属名をご記入ください。

男性・女性　　年齢　　歳

幼稚園・保育園・学校 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

6　印象に残っている点、その他の感想などございましたらご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

当アンケートは、ロビーにございます回収箱にお入れいただくか、大変お手数ですが、後日下記までご郵送いただければ幸いです。

〒380-0915　長野市上千田 141　文化女子大学長野専門学校　保育科　卒業共同研究係

介護福祉士養成課程における
「世界の高齢者介護」を学ぶための
効果的な教材・資料について

佐藤　登紀子

Teaching Materials Effective for Learning "the Elderly Care of the World"
in the Care Worker Training Course

SATO,　Tokiko

キーワード：　介護専門職の資格、EPA（経済連携協定）

はじめに

わが国は世界に類を見ない超スピードで進行しているといわれる“高齢社会”であるが、全世界、特に先進地域でも同じ道を歩んでいる。

わが国の社会福祉の施策は、経済・文化・社会の動向に大きく影響を受けながら、独自の施策をつくり発展してきているが、世界各国の影響もまた見逃せない。

特に、高齢者の介護問題について、各国の取り組みと動向を具体的にとらえることは、わが国の高齢化に対する介護問題の特徴と方向性についての理解を深めるうえに欠かせない重要なことであると考える。そのための教材・資料は生徒にわかりやすく、主体的な追求を促すものでなければならず、そのための工夫が今私たちに課せられている。

“人生の最終章及び看取りまで”を支えるという介護の専門性に強く心を動かされ、懸命に取り組んできた実践の記録を含め、長年温めてきた資料等を上記の趣旨に沿って、ここに一つにまとめてみた。

これから介護を学ぶ学生にとって自分の立ち位置を自覚し、さらに世界をリードするライセンス保持者としての礎となる資料になればと願うものである。

１　資料作成の方法

「介護の基本」のまとめとして、わずかのコマ数の中で、高齢者福祉に対する世界の動向とわが国の現状、今後の方向性について、包括的にとらえていくために、特に諸外国の取

り組みについては、わかりやすい視覚教材の必要性を痛感した。

さらに、目前のわが国の厳しい介護場面や労働条件の情報を得るにつけ元気をなくしている学生だが、広く世界に視野を広げることから、今後に少しでも明るい展望が持てるようになるのではないかと期待するものである。

幸いなことに、1993 年にアメリカ、カナダに、2004 年にデンマーク、イタリアの福祉施設と 2005 年にフィリピンの介護専門学校の視察を経験することができ、その写真を基にスライドを作成した。しかし、スライドだけでは不十分と考え、代表的な５カ国の情報を一覧表にしたものが **資料 １** である。情報の骨子としたところは、佐藤の聞き取りを中心としたが、年次経過に伴う変化・変更があるため、数値・年度・制度名等は追加・修正した。

折しも、2009(平成２１)年に経済連携協定（ＥＰＡ）交渉により、フィリピン介護士 200 余名が来日し、働きながら介護福祉士国家資格取得を目指すことになった。

長野県下の施設には３名の候補生がいるが、そのうち二人の候補生が長野市内の施設で働きながら学んでいる。たまたまその施設の理事長に依頼され、彼女らの国家試験受験対策自己学習の支援をすることになった。

決して恵まれているとはいえない厳しい条件の中ではあるが、家族のため、祖国の後輩のためにひたむきに明るく向上心を持って励む彼女らの人間性に深く触れることとなった。私の受けたこの感銘を、ぜひ本校の学生とも分かち合いたいと願い交流学習を計画した。その授業案と学生の感想を **資料 ２- ①** 、 **資料 ２- ②** に示す。

２　授業の実際

「社会福祉士及び介護福祉士法」の改定に伴い、介護福祉士養成課程の教育内容が見直され、2009 年度から新カリキュラムが施行された。

旧カリキュラムでは、介護概論の中で世界の福祉、介護福祉について学び、介護の定義、理念、倫理性を身につけさせるよう学習計画を立ててきた。新カリキュラムについては、介護福祉士にとってより実践的能力をつけるためのカリキュラム構成となり、他教科と重なる部分も多い。世界の介護についてどの教科で実施するか、本校ではまだ他教科との調整がつかずにいる。

そこで、本校独自の養成コースである高度専門士科四年生の「介護福祉特講Ⅰ」の中で実施したものである。

高度専門士科四年生の「介護福祉特講Ⅰ」は、一・二年生で介護福祉士課程を修了した学生に、より幅の広い知識と人的交流の経験を積ませるとともに、4 年間という長い学生生活を楽しく充実したものとするためのプログラムとして取り入れたものである。

資料１の紙面による説明だけでは反応の少なかった学生が、スライドを見る場面では、驚きの歓声や笑い声を発し、画面に引き込まれていく姿があった。各国の特徴や高齢者像

の概要をつかめたものと思われる。

その後計画したフィリピン介護士候補生との交流学習では、何よりも厳しい条件の下で、わずか在日１年間であるにもかかわらず滑らかで美しい日本語を話す姿と真剣に介護福祉士資格取得に向けて取り組む姿に大いに触発され、ともに国家試験合格を目指そうと誓い合ったものである。

学生同士の何のこだわりのない交流の姿を見ていると、将来の福祉現場の明るい兆しが感じられ、心豊かにされるものがあった。

将来、福祉現場でチームリーダーとして活動してゆく学生にとって、視野を広めるために有効な学習であったととらえる。

資料作成のもととなった海外視察の時期と現在とでは、やや年数の隔たりはあったが、まとめとしてフィリピン介護候補生との交流ができたことは、単元としてまとまりを見せ、学生の異文化交流への目をむける機会となった。

３　今後の展望

社会福祉士及び介護福祉士法の改定に伴い、介護福祉士養成課程の教育内容が見直され、2009 年度から新カリキュラムが施行された。

介護専攻科一年生のカリキュラムにおいては、どの教科も時間的に厳しいものがあるが、学習内容を調整・精選して何とか取り入れて行きたい。

ＥＰＡによる看護・介護候補生の導入は、今後も続くものであり、これらの交流学習を通して、現在、介護福祉研修・研究の現場で行なわれている各国との介護理念や技術の交流をより身近なものとして取り入れてゆく素地を養いたいと願うものである。

本校にて　フィリピン介護候補生との交流学習会　　2011 年　6 月

参考文献

井上千津子他　2005「介護福祉総論」第一法規
中井久子他　2002「介護福祉学研究会監修　海外における介護福祉の動向」中央法規
西村洋子責任編集　2005「介護概論」　メジカルフレンド社
大熊由紀子　1993 「『寝たきり老人』のいる国、いない国」ぶどう社
岡本祐三　1991「デンマークに学ぶ豊かな老後」　朝日新聞社
山本和則　1995「体験ルポ　世界の高齢者福祉」　岩波書店

※　聞き取り協力機関

（１）アメリカ・カナダコース　1993 年 9 月　長野県社会部主催「福祉の翼」派遣事業

①　ロスアンゼルス　「アンジェルスプラザ」
キリスト教系の非営利法人の運営する 62 歳以上の低所得者のためのリタイアメントアパート

②　ロスアンゼルス　「センブインセントメヂカルセンター」
キリスト教系の病院

③　ロスアンゼルス　「サントニオガーデン」
高級高齢者住宅

④　ビクトリア　Parkwood Retierment Resldence&CareCenter
高齢者集合住宅及びナーシングホーム

⑤　カルガリー　Sarcee Auxiliary Hospital
中間施設及びナーシングホーム

＊　上記④⑤については、資料記載略

（２）デンマーク・イタリアコース　2003 年 11 月
長野県介護福祉士会主催「ヨーロッパ視察研修」

①　コペンハーゲン　「インペリアホテル」
デンマーク高齢者福祉制度についてのレクチャー

②　コペンハーゲン　ディサービスセンター「ベラセンター」
国民年金受給者で、要支援　～　要介護１程度の高齢者が人との交流や趣味を通して一日を楽しむ

③　コペンハーゲン　特別養護老人ホーム「ジェルホフガード」
現在の入所者　男性５名、女性３５名
このうち２３名が認知症高齢者
平均 87.5 歳　　平均介護度３

④　ミラノ　「アルコナーテ」　「ブスカーテ」

国民年金受給者の老人福祉センター
⑤　ミラノ　「カーザファミリア・ディヴィラコルテーゼ」
特別養護老人ホーム　定員６４名　介護度２~３程度
＊　上記　④⑤については、資料記載略

（3）フィリピン　2005 年 10 月　長野県高齢者福祉協会・長野県介護福祉士会
“福祉の翼２１”2005 年海外セミナ

① セブ島　Bakinng　Medical　Center care school
介護専門学校　病院

② セブ島　UHA Care giving　Training
種別　介護専門学校

③ セブ島　CEBU DOCTOR’S UNIVERSITY OSPITAR
種別　大学総合病院

④ マニラ　GLOBAL CAREGIVER SERVICS & TRAININNG CENTER
種別　介護専門学校

⑤ マニラ　CAREINK ASIA TRAINING INC・・
種別　介護専門学校

⑥ マニラ　PHILS LIFE ORCHI CLUB
種別　リタイアメント　ヴィレッジ&病院

付記

上記、聞き取りの海外視察研修はいずれも現職中の休暇を利用しての旅行であり、職場の上司・同僚の皆様が快く承諾してくださったことに感謝申し上げます。

また、同行し指導してくださった県内関係機関の皆様方にも、異国での楽しい交流とともに、それぞれの職場で今後の福祉社会に夢を持って取り組んでおられる姿に接し、同志としてとても励まされるものがありましたことをお伝えし、改めて感謝申し上げます。

さらに、外国の諸施設では利用者様の目前での私どもの視察に、いずれも素晴らしい笑顔で対応してくださり、印象をいっそう深くするものでありました。

アメリカでの活き活きとボランティア活動に励む元気な高齢者の姿と、施設環境のアメニティ。デンマークでのその人らしさを大切にした豊かな施設生活。フィリピンでの年長者への尊敬と家族愛等々、視察の目的が十分達せられ、納得のゆく視察旅行となりました。

皆様方のご協力に心より御礼申し上げ、報告に代えさせていただきます。

資 料 1

諸外国における高齢者介護の概要

	デンマーク（2003年）	ドイツ	アメリカ	フィリピン（2004年）	日本 （2004年）
人　　口	530万人	8,160万人（2010年）	3億 875万人(2010年)	8,624万人	1億2,700万人
高齢化率	15.0 %	15.9 % （2000年）	13.2 %（2010年）		19.5 %
高齢社会への期間(7～14%)	80～90年	45年	65年		25年
平均寿命	男76.0歳　女78.3歳(2003年)	男76.0歳　女82.0歳(2003年)	男75.0歳　女80.5歳（2003年）	約63.0歳	男78.7歳　女85.6歳
特定出生率	1.78人（微増中）	1.4人（1997年）	2.04人（1998年）	約3～4人（子ども多い） 約5～6人（平均世帯数）	1.29人 2.7人（平均世帯数）
女性の就業	15～65歳　90 %以上 1週間37時間労働	65 %(2009年)	66 % (2009年)	男女比でみると女性の方が就業率高い（39.1 %）	41.0 %　（2001年） 1週間 40時間労働
宗　　教	キリスト教80%以上 （回教徒多くなっている）			カソリック83 % その他キリスト教10 % イスラム教・他7 %	神道系54 % 仏教系41 % キリスト教系0.7 %　（1993年）
国の特徴	○立憲君主国、資本主義国 ・国民の満足度世界第1位 ・情報公開の国第3位 ○ノーマライゼーション発祥地 ○税負担（教育・医療・福祉）は消費税22 %含む約60 %負担 ○20歳で独立して世帯を持つ ○家族意識は強い ○60～70歳退職 国民年金65歳より支給、不安ない ◎寝たきり老人のいない国（4.5%）(1988) ◎高齢者福祉の原則 ①人生継続性の原則 ②自己決定の尊重の原則 ③残存能力、自己資源活用の原則	○ワイマール憲法(1919年) 世界で初めて憲法に生存権を取り入れる ○宗教団体や労働組合が推し進める慈悲的傾向が強い ○1978年160万人の在宅要介護者の中で63 %が家族介護、12 %が社会サービスを受けている ○老人ホームへの入所は社会的落伍者ととらえられる面があった ○家族介護は娘や息子の嫁の手にゆだねられている	○独立宣言(1776年) ○地方分権国家 ○個人主義強く、介護に関しては個人の自己責任として考える ○介護サービス費用の負担は私費による ◎寝たきり老人12 %（1989年）	○国民の貧富の差が大きく、国民の4割は低所得者といわれている ○家族意識が強い。老人を尊敬する気風が強い。ほとんどが在宅介護である ○医療は感染症、肺結核、癌等の受診が多い ○生活習慣病、認知症はない ○亜熱帯気候に属し、平均気温32度、最高気温36度で生活しやすい	○世界1の長寿国、少子高齢化社会が特徴 ○ライフスタイルの多様化 ○高齢者の7割以上が家族とともに住みたい ○税負担　消費税5%を含めて医療保険等で40 %税負担といわれている ◎寝たきり老人は65歳以上の人口の30~40 %（1988年 ） ◎介護保険施策の基本理念 ①ノーマライゼーションの推進 ②QOLの追及 ③インフォームドチョイス・サービス提供の基本視点 ①　個人の尊厳の保持 ②　地域福祉の推進 ③　総合的サービスの提供

社会保障制度の変遷	・1930 年社会法一本化（公的福祉へ） ・1956 年国民年金法 ・1970～1976 年自治体改革と生活支援法の成立 ・国はあるべき方向性と枠組みを起案し、具体的サービス内容・量・質は各自治体が決定するシステム ・個人の福祉は社会の責任とみなす ・1989 念ホームヘルパー数 人口 10 万あたり 471 人	・エルバーフェルト制度（民生委員制度の祖）（貧困救済事業） ・ビスマルクによる社会保障制度（1883） ・1974 年ホーム法 （1887 ） （入所者と施設の対等性） ・65 歳以上老人の 95%が在宅で生活し、介護が必要な高齢者の 70%は家族の世話を受けている ・1995 年介護保険制度移行 ・高齢者介護は国家の責任において行うことが必要、と介護の社会化が図られつつある	・1965 年　メディケア：高齢者および障碍者のための医療保険制度 メディケイド：低所得者対象の医療介護保険制度 ・1970 年代ナーシングホームの発達：老化や心身の障害のある高齢者に医療と介護を提供する施設 ・1994 年メディケア 1,649 億ドルのうちナーシングホームへ 75 億ドル、メディケイド 1,083 億ドルのうち 271 億ドルナーシングホームへ　等医療より介護へ急増している ・1990 年代後半には在宅サービス利用者数・事業者数共に大幅増大 ・高齢者のスペンドダウン（介護費用に資材を投じて資産を使い果たしてしまう人も多い） ・新しい制度の検討が望まれる	・1960 年　移民政策自由化と割り当て制の廃止により、看護師、医師、会計士、エンジニア、教師などの多くは米国、カナダ、オーストラリアへ出国、永住している ・現在 2,500 人を超える労働者が毎年海外へ就労を目的に出国し、2000 年には海外からのドル送金額は 61 億米ドルとなり、国の経済を救った ・発展途上の資本主義国	1946 年　日本国憲法制定 1950 年　生活保護法制定 1963 年　老人福祉法成立 施設サービス中心 在宅福祉サービス＝低所得非課税世帯 1982 年　老人保健法成立 1990 年　福祉関係八法の改正 1994 年　新ゴールドプラン策定 2000 年　介護保険制度出発 （介護の社会化） 2000 年　ゴールドプラン２１策定 2005 年　改正介護保険法 1989 年　ホームヘルパー数 人口 10 万あたり 19.4 人
現行の社会保障制度	◎生活支援法サービス内容の例 ・情報提供や助言　・現金給付 ・在宅ケアの充実（訪問看護師、ホームヘルパーの派遣） ・補聴器具の貸与、住宅改善 ・デイセンター（送迎サービス） ・住宅（身障者・高齢者住宅） ・施設（プライエム・ケア付き住宅）	◎介護保険制度(1995 年世界初) ○施設サービス ・老人住居ホーム　・老人ホーム ・老人介護ホーム・老人複合施設 ○在宅福祉サービス ・ソソチアル　・スターチオン 福祉サービスおよび保健サービスの両分野から専門職がチームを組んで在宅介護を目指すもの ○現金給付と併用 介護給付を受けている内 70%は在宅介護､30%は施設介護である	◎介護施設における虐待について長期療養オンブズマン制度を採用（ボランティア活動） ◎第三者評価機関制度の創設 ○NPO、ボランティア活動が盛ん	○東南アジア諸国の間では、整備されているほうである ○中央の国家社会福祉関発省 ○1991 年地方自治法による地方分権化による取り組み ○NGO（非政府組織）やソーシャルワーカーの活動が盛んである	◎改正介護保険制度（2006 年 4 月より） ○居宅サービス（12 種） ○施設サービス（3 種） ○地域密着型サービス（6 種） ◎地域福祉権利擁護事業 ・成年後見制度 ◎情報公開制度（2006 年） ◎第三者評価事業（2006 年） ◎予防給付サービス(2006 年)
介護専門職の資格	○社会保険介護士準備過程（1 年） ○社会保険介護士助手（1 年） ○社会保険介護士（1.5 年） ◎養成はすべて公的機関（市町村）で必要数養成される	○老人介護士（2 年）(1962) （州独自の法則） ・対象は高齢者に限る ◎現場実習及び医学が重視される	○シルバーサービス産業が盛ん ○要介護高齢者のうち、施設入所者は 22％、在宅で介護を受ける者は約 78％で、その多くは娘、妻、友人による介護に頼っている	○介護養成校で学ぶ（6～7 ヶ月） ・卒業試験　100 ％合格 ・国家試験　約 70 ％合格 ◎海外へ就職希望強い	○訪問介護員　2 級 ○訪問介護員　1 級 ○介護福祉士（国家試験）取得者数約 729,101 人(2008 年) ◎2006 年よりフィリピン、インドネシアより介護や看護に従事する人を条件付きで受け入れ決定

資 料 2 - ①

教科名〔 介護福祉特講 〕

『 世界の高齢者介護 』

1 授業のねらい　日本に来て、働きながら介護福祉士資格取得を目指す外国の同世代の若者との交流を通して、外国の高齢者介護の実情や文化の一端に触れ、また日本での努力の姿から学生自身の資格取得への決意を再確認する。

2 授 業 形 態　①全体講義　②グループワーク　③全体活動

3 実 施 時 間　２時間中の第２時　【 前時はスライドと資料によって諸外国の高齢者介護について学び、次時の交流学習の内容について考えた。】

時	時間	授　業　内　容	留 意 事 項
9:05	10分	1　はじめの挨拶（対面） ・ 教師は介護候補生二人を伴って入場する。 ・ 挨拶（一同起立、着席） ・ 前回の授業内容を簡単に振り返り、本日の目的と授業の流れを説明する。	* 室内環境、資料（授業の流れ・話し合い例）、機器を整えておく * フィリピン介護候補生には自己紹介の練習をさせておく
	5	2　自己紹介 ・ クリスティナさん ・ ウェマ　　さん	* 拍手で迎える
9:20	10	3　学生の自己紹介（全員）	* 時間の制約
	5	4　グループ分け ・ クリスティナ班　（＋４名）　意外性をもたらす楽しい“くじ引き”方法で２班に分かれる。 ・ ウェマ　　班　（＋４名）	* 和やかな中にも、期待と緊張感を持って取り組むことができる * 記録用紙
9:35	30	5　グループで話し合い ・ 役割を決める（司会・記録） ・ 話し合いの一例 ・ 日本で資格を取ろうとした理由 ・ 介護士を目指したきっかけ ・ 日本に来て驚いたこと、困ったこと ・ 日本に来て楽しかったこと、よかったこと ・ 日本で好きな食べ物、好きな言葉、行きたい場所 ・ 現在の生活、仕事、勉強 ・ フィリピンの学生の様子（義務教育、高等教育、介護など） ・ 家庭の様子（人数、高齢者の様子、家族の楽しみ）	* 話し合いの要点は示すが、自由な雰囲気で楽しくできるように * 記録係りは話し合いの内容を提出 * 歌、全員が触れ合えるフォークダンスなど CD プレイヤー
10:05	20	6　レクリエーション ・ フィリピン介護候補生から ・ 本校学生から	* 再会を期しての握手など
10:25	10	7　終わりの挨拶 ・ フィリピン介護候補生から ・ 本校学生から	* カメラマン
10:35		8　記念撮影 ○　終了	

資 料 2－②

フィリピン介護候補生との交流会

〔 グループ話し合いの内容（概要)〕

1　日本という国を選んだ理由は
- 家族のために。
- 日本とフィリピンは飛行機で２時間くらいで距離が近いから。

2　介護を目指したきっかけは
- 介護福祉士の資格を取りたかったから。

3　驚いたことは
- 地震が多い。
- 物価が高い。

4　困ったことは
- 雪が降るときは自転車が大変。
- 物価が高い。
- コミュニケーションが難しい。

5　日本に来て楽しかったこと・よかったことは
- 京都、中央アルプス等を旅行したこと。
- 大変難しい日本語が、少し慣れて話せるようになったこと。
- 日本語は同じ言葉で２つの意味を持つので難しい。
- 初めて覚えた日本語は、“挨拶”。

6　行きたいところは
- 大阪城、富士山。

7　好きな食べ物は
- 寿司、　ラーメン、　アドバゴを食べたい。

8　どんな仕事、勉強をしているか
- 水・木・金は日本語の勉強、介護の勉強、問題集の勉強など。
- コスモスでは、早・遅番の仕事をしている。
- 休みのときは、パソコンでインターネットをしたり、テレビで“おひさま”を見ている。

9　フィリピンの学生の様子は
- 小学校６年、中学校４年は義務教育で大学は４～６年がある。専門学校は、眼科医、看護師が多い。
  日本での介護士を希望する人が多い。
  皆、まじめに学生生活を送っている。

10　家族介護について
- フィリピンは施設が少なく、費用が高い。
- 家族と家で過ごすケースが多い。
- 子供が介護をするのが普通である。
- 日本と違って家族が一緒に暮らしている。世帯人数は４～８人である。
- 看護師だけしかいないので、老人は居宅で介護されている。

○　その他、若者のファッションや、お友達等について話が盛り上がりました。
○　「茶摘」、「幸せなら手をたたこう」、「故郷」を歌って閉会としました。

文化学園長野専門学校　研究紀要投稿既定

１．　目的

文化学園長野専門学校研究紀要は、本校における研究・教育活動の成果を広く公表することを目的として発行する。

２．　投稿資格

紀要に投稿できる者は、次のとおりとする。

（1）　本校専任教員および兼任教員

（2）　本校専任教員との共同研究者（この場合は本校専任教員と連名とする）

（3）　編集委員会が執筆を依頼した者、あるいは執筆を認めた者

３．　投稿原稿の種類

原則として、次のとおりとし、未公刊のものに限る。

原著論文、総説論文、研究ノート、報告（実践報告・調査報告）、書評、資料紹介など。

上記の他、紀要編集委員会が適当と認めたもの。

４．　提出原稿

原稿の作成は、別に定める「紀要原稿作成要領」に従って執筆する。

５．　原稿の提出先

本校紀要編集委員会

６．　採択

原稿の採択と調整は、紀要編集委員会で行う。

７．　著作権

掲載された論文などの著作権は、原則として文化学園長野専門学校に帰属する。ただし、著者が自分の論文などを利用することは差し支えない。

編集委員会

守　秀子（委員長）

島田　左一郎

竹前　健治

吉澤　富美子

平成 23 年 12 月 29 日発行

文化学園長野専門学校

研究紀要　第 3 号

編集発行　　文化学園長野専門学校

〒380-0915　長野市上千田 141

TEL. 026-227-2090

FAX. 026-224-2200

印刷　　東方出版社

〒381-0038　長野市東和田 902-4

TEL. 026-244-4327

BULLETIN
OF
BUNKA GAKUEN NAGANO TECHNICAL COLLEGE

No.3

CONTENTS

Analyses of Students' Self-Evaluation
of Pre-service Practices
in Nursery Schools and Kindergartens ---------- MORI, Hideko
SHIMADA, Saichiro
AMADA, Hirokazu
KURASHINA, Miharu
SHIMODAIRA, Masae
ISHIZAKA, Yumiko
TOYA, Naoki

An Evaluation of Dance Lessons in Nursery Education Curriculum:
A Questionnaire Study on the Lesson Order
of Two Types of Rhythm Rich Dances ---------- ISHIZAKA, Yumiko

Historical Perspectives on the Child Protection ---------- TAKEMAE, Kenji

"Fushigi na Takaramono (Fantastic Treasures)"
An Original Musical Creation and Performance
by Nursery Training Course Students 2010 ---------- SHIMODAIRA, Masae

Teaching Materials Effective for Learning
"the Elderly Care of the World"
in the Care Worker Training Course ---------- SATO, Tokiko

2011

文化学園長野専門学校　研究紀要

第三号

二〇一一年